

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 270

水 江 遺 跡

高梁川河川整備事業に伴う発掘調査 1

2 0 2 4

岡 山 県 教 育 委 員 会



1 調査地遠景（北上空から）



2 調査地遠景（南西上空から）



1 1区上層全景（北西上空から）



2 2区全景（北西上空から）

序

高梁川は、岡山・鳥取県境を源流とし、岡山県西部を南下して瀬戸内海に注ぐ、流路延長111km、流域面積2,670km²の一級河川です。この高梁川と小田川の合流点付替え工事に伴い、新たな合流点付近に位置する高梁川東岸部の堤防補強工事が行われることになりました。

岡山県教育委員会では、事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、関係機関と協議を重ねてまいりましたが、現状のまま保存することが困難な部分についてはやむを得ず記録保存の措置を講じることとし、発掘調査を実施いたしました。

その結果、狭小な範囲の調査ではありましたが、縄文時代から室町時代にかけての遺構や遺物が見つかるなど、貴重な成果を得ることができました。

これらの調査成果を収めた本書が、地域の歴史研究に寄与し、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたりましては、国土交通省中国地方整備局岡山河川事務所をはじめとする関係機関や地域住民の皆様から御理解と御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和6年12月

岡山県古代吉備文化財センター
所 長 奥 山 修 司

例 言

- 1 本書は、岡山県教育委員会が高梁川河川整備事業に伴い、国土交通省中国地方整備局岡山河川事務所と岡山県の委託契約に基づき実施した、水江遺跡の発掘調査報告書である。契約事項は文化財課が行い、発掘調査及び報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。
- 2 水江遺跡は倉敷市水江・西阿知町に所在する。
- 3 本発掘調査は令和4年度に実施し、澤山孝之・渡邊恵里子・石田爲成・藤井雅大・間所克仁・北門幸二郎・森本蓮が担当した。調査面積は650㎡である。
- 4 発掘調査及び報告書の作成にあたって「高梁川河川整備事業に伴う埋蔵文化財保護調査指導会」を設け、次の委員各位から指導・助言をいただいた。記して謝意を表する。なお、() は依頼時の所属機関名である。

稲田 孝司（岡山大学名誉教授）
出宮 徳尚（元岡山市教育委員会）
野崎 貴博（岡山大学文明動態学研究所）
伴 祐子（倉敷考古館）
福本 明（岡山商科大学）
- 5 本書の作成は、令和5・6年度に実施し、令和5年度は米田克彦・物部茂樹・石田・團奈歩・岡本泰典・小林有紀子・杉浦香菜子・森本が、令和6年度は金田善敬・物部・石田・岡本・小林・西村奏・四田寛人・森本が担当した。
- 6 本書の執筆は、調査担当者が分担し、文責は節及び各項目、あるいは遺構ごとの文末に示した。また、全体の編集は石田・物部が行った。
- 7 獣骨の同定については、岡山理科大学の富岡直人氏に依頼し、有益な教示を得た。記して謝意を表する。
- 8 本書に関係する遺物の分析については、次の機関と業務委託契約を行い実施した。

AMS年代測定 文化財調査コンサルタント株式会社
- 9 遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 10 本書に関連する遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度値は標高である。
- 2 遺構全体図及び遺構図が示す北方位は平面直角座標第Ⅴ系（世界測地系）の座標北である。
- 3 本書に掲載した地図のうち、第2図（左）は旧版地図（国土地理院）を、第2図（右）及び第3図は電子地形図25000（国土地理院）を加工・加筆したものである。第4図及び第27図は倉敷市長の承認を得て、倉敷市所管の測量成果倉敷市都市計画図S=1/2,500を複製したものである。（承認番号 令和5年9月20日 都第335号）
- 4 土層と遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠している。
- 5 遺構・遺物の縮尺は個々に明記している。
- 6 全体図では遺構名に次のような略称を用いている。
土坑：土 たわみ：た
- 7 遺構・遺物の番号は、それぞれ種類別に通し番号を付している。
- 8 遺物番号は、土器は番号のみ、それ以外は次の記号を番号の前に付している。
瓦：R 土製品：C 金属製品：M
- 9 土器実測図の中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性があることを示している。
- 10 本書で用いた時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分や世紀を併用している。なお、7世紀代については、ここでは古墳時代を表記として用いている。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 発掘調査及び報告書作成の経過	5
第3節 日誌抄	6
第4節 発掘調査及び報告書作成の体制	7
第3章 発掘調査の成果	9
第1節 1区の調査	9
第2節 2区の調査	21
第4章 総括	25

遺構一覧表・遺物観察表

図版

報告書抄録

図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)	1	第14図 溝4出土遺物1〈南西部〉 (1/4・1/2)	15
第2図 河川と遺跡 (1/50,000) 左：明治32年 (1899) 発行 右：平成26年 (2014) 調製	2	第15図 溝4出土遺物2〈北東部〉 (1/4)	16
第3図 周辺遺跡分布図 (1/40,000)	3	第16図 溝5・出土遺物 (1/30・1/4・1/3)	17
第4図 調査区配置図 (1/3,000)	6	第17図 遺構に伴わない遺物1 (1/4)	18
第5図 1区調査区全体図 (1/300)	9	第18図 遺構に伴わない遺物2 (1/4・1/3)	19
第6図 1区土層断面図 (1/60)	10	第19図 遺構に伴わない遺物3 (1/4)	19
第7図 1区遺構全体図〈下層〉 (1/100)	11	第20図 遺構に伴わない遺物4 (1/4・1/3)	20
第8図 土坑1・出土土器 (1/30・1/4)	11	第21図 2区調査区全体図 (1/300)	21
第9図 土坑2 (1/30)	11	第22図 2区土層断面図 (1/60)	22
第10図 溝1・出土遺物、溝2、溝3 (1/30・1/4)	12	第23図 2区西半全体図 (1/100)	23
第11図 1区遺構全体図〈上層〉 (1/100)	12	第24図 溝6・出土土器 (1/30・1/4)	23
第12図 溝4 (1/30)	13	第25図 たわみ1・出土土器 (1/30・1/4)	24
第13図 溝4〈南西部〉 (1/30)	14	第26図 遺構に伴わない遺物5 (1/4)	24
		第27図 水江遺跡旧地形復元図 (1/10,000)	25

表 目 次

表 1	文化財保護法に基づく文書一覧……………	8	表 6	瓦観察表……………	29
表 2	土坑一覧……………	27	表 7	土製品観察表……………	30
表 3	溝一覧……………	27	表 8	金属製品観察表……………	30
表 4	たわみ一覧……………	27	表 9	年代測定試料一覧表……………	30
表 5	土器観察表……………	27			

写 真 目 次

写真 1	2区全景（南西から）……………	22
------	-----------------	----

巻頭図版目次

巻頭図版 1	巻頭図版 2
1 調査地遠景（北上空から）	1 1区上層全景（北西上空から）
2 調査地遠景（南西上空から）	2 2区全景（北西上空から）

図 版 目 次

図版 1	2 溝 4 石列・土師器皿検出状況（北から）
1 1区下層全景（北西上空から）	3 溝 5（西から）
2 1区下層北半全景（北西上空から）	図版 6
3 1区下層南半全景（北西上空から）	1 2区遠景（北上空から）
図版 2	2 2区西半全景（北西から）
1 1区上層全景（北西上空から）	3 2区南西壁（北東から）
2 1区東壁（西から）	図版 7
3 土坑 1（北から）	1 溝 6（北から）
図版 3	2 たわみ 1 検出状況（北西から）
1 土坑 2（南東から）	3 たわみ 1（北西から）
2 溝 1（東から）	図版 8
3 溝 2（南西から）	1 土坑 1・溝 1・溝 6・たわみ 1 出土土器
図版 4	2 溝 4 出土遺物①
1 溝 4（南西から）	図版 9
2 溝 4（北東から）	溝 4 出土遺物②
3 溝 4 土師器皿出土状況（北東から）	図版 10
図版 5	遺構に伴わない遺物
1 溝 4 石列・土師器皿検出状況（北東から）	

第1章 遺跡の位置と環境

高梁川は岡山・鳥取県境を源流として岡山県西部を南下し、かつては倉敷市街地の北西にある酒津八幡山の北側で東西に分流し、瀬戸内海へと注いでいた（第2図）。水江遺跡（第3図1、以下同）は、八幡山の南側、西高梁川の沖積によって河口部付近に形成された微高地上に位置し、明治時代までは集落や田畑が営まれていた。高梁川下流域では、江戸時代から明治時代にかけて洪水被害が頻発していた。その対策として明治44年（1911）から大正14年（1925）にかけて大規模な河川改修工事が行われ⁽¹⁾、高梁川流路の付け替えと一本化の結果、遺跡の大部分は現高梁川の中州や河川敷となって現在に至っている。

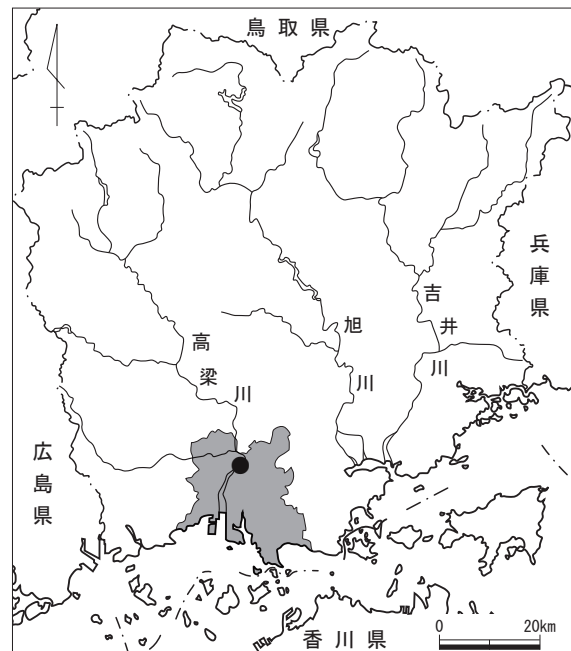
高梁川下流域において、人間活動の最初の痕跡が認められるのは旧石器時代に遡る。近隣では管生小学校裏山遺跡（32）でナイフ形石器や尖頭器などが出土している⁽²⁾。

続く縄文時代には、倉敷市街地北側の山裾付近まで海が入り内湾を形成していたと考えられ、沿岸には多くの貝塚が認められる⁽³⁾。高梁川河口部周辺では、瀬戸内地域の縄文時代前・中期の標識土器が出土した里木貝塚（36）⁽⁴⁾や縄文時代中期を中心とした西岡貝塚（31）⁽⁵⁾が所在する。

弥生時代でも中期以降になると沖積化が進み、高梁川河口部付近に遺跡が認められるようになる。水江遺跡と北東側に隣接する酒津遺跡（2）は、昭和30年（1955）に高梁川の水量が減少した際、多量の土器が河床から発見され、その存在が明らかになった⁽⁶⁾。翌年の西阿知浄水場濾過池工事の際にも同一の特徴をもった土器が大量に出土したことから、これらの土器は「酒津式土器」と名付けられ⁽⁷⁾、弥生時代終末期の吉備南部を代表する土器として知られている。また、近隣では酒津貝塚（8）⁽⁸⁾や高地性集落の酒津八幡山山頂遺跡（11）⁽⁹⁾から弥生時代中期の土器が出土している。

高梁川河口部周辺では墳墓は確認されていないが、内陸部の小田川沿いに黒宮大塚墳丘墓⁽¹⁰⁾、総社平野の南端に鋳物師谷2号墓⁽¹¹⁾や宮山墳墓群⁽¹²⁾などの墳丘墓が後期後半以降に認められる。

古墳時代前期前半においても、近辺では前方後円墳等は確認されていない。中期には高梁川河口部の東岸に全長75m以上の前方後円墳の行願院裏山古墳（30）⁽¹³⁾が所在する。調査地北側にある八幡山の西から南にかけての丘陵上には、径約20mを測る酒津山44号墳（14）や全長約6.7mの横穴式石室をもつ酒津山20号墳（12）など、古墳時代前半期から後半期にかけての小・中規模墳が多数認められる⁽¹⁴⁾。調査地の北西に位置する南山山塊では、前期後半から中期前半にかけての古墳が調査されている南山明地古墳群（16）⁽¹⁵⁾があり、中期後半には帆立貝形前方後円墳である勝負砂古墳（19）⁽¹⁶⁾、小冢古墳（18）⁽¹⁷⁾、天狗山古墳（17）⁽¹⁸⁾



第1図 遺跡位置図（1/1,500,000）

が存在する。また、後期には山裾に全長38mの前方後円墳で横穴式石室を主体とする二万大塚古墳(20)⁽¹⁹⁾が築かれる。集落についてはよく分かっていないが、高梁川河口部の西岸に位置する前田遺跡(35)⁽²⁰⁾では、後期後半の製塩炉が見つまっている。

古代では、高梁川河口部付近の沖積地に、『和名類聚抄』に記された「浅口郡阿智郷・窪屋郡大市郷・窪屋郡阿智郷」が所在し、水江遺跡が立地する微高地は「浅口郡阿智郷」に比定されている⁽²¹⁾。さらに、水江遺跡・酒津遺跡の出土遺物の検討から、ここに高梁川の水運を利用した「国津」もしくは「郡津」が存在する可能性が指摘されている⁽²²⁾。倉敷市街地北縁の山塊には、応徳3年(1086)銘の瓦経が出土した安養寺裏山経塚群(27)⁽²³⁾や、平安後期の瓦が散布する西岡廃寺(29)⁽²⁴⁾が所在する。

中世では、水江遺跡から南へ約600mの場所に西阿知遍照院遺跡(33)が所在し、応永23年(1416)再建遍照院三重塔の礎石の下から室町時代初期の備前焼の壺や、塔近くから南北朝～室町時代初期の井戸が確認されており⁽²⁵⁾、沖積化が進んでいることが分かる。また、高梁川河口部付近に「青江鍛冶」と称される刀工の活動が知られている⁽²⁶⁾。『太平記』に記された建武3年(1336)の「福山合戦」の舞台となった福山城跡(26)は旧山陽道を眼下にする山頂に在り、戦国末期と推定される南山城跡(16)⁽²⁷⁾は、秀吉の「備中高松城水攻め」後、毛利氏と織田(豊臣)氏の領地境となる高梁川と旧山陽道を望む丘陵端部に位置している。

近世になると、高梁川河口部から南へ干拓・新田開発が本格化する。高梁川から玉島港へ高瀬舟の通行を可能にする「高瀬通し」が整備され、その水位を調節する一の口水門(37)が残っている⁽²⁸⁾。



※●は調査区の位置

第2図 河川と遺跡(1/50,000) 左:明治32年(1899)発行 右:平成26年(2014)調製



- 1 水江遺跡 2 酒津遺跡 3 酒津妙見山4号墳 4 酒津妙見山1号墳 5 酒津妙見山2号墳 6 酒津妙見山3号墳
 7 青江城跡 8 酒津貝塚 9 酒津山1号墳 10 酒津山2号墳 11 酒津八幡山山頂遺跡・流山城跡 12 酒津山20号墳
 13 酒津山45号墳 14 酒津山44号墳 15 梁場山城跡 16 南山城跡・南山明地古墳群・南山明地遺跡 17 天狗山古墳
 18 小丸古墳 19 勝負砂古墳 20 二万大塚古墳 21 満願寺宝篋印塔 22 岡田藩陣屋跡 23 下軽部遺跡 24 軽部山城跡
 25 福山寺跡 26 福山城跡 27 安養寺裏山経塚群 28 朝原寺跡 29 西岡廃寺 30 行願院裏山古墳(西岡3号墳)
 31 西岡貝塚 32 菅生小学校裏山遺跡 33 西阿知遍照院遺跡 34 片島城跡 35 前田遺跡 36 里木貝塚 37 一の口水門

第3図 周辺遺跡分布図 (1/40,000)

近代では、冒頭に記した高梁川改修工事に伴い、それまで使用されてきた用水の統合や取水口の合口化等が行われた。この高梁川東西用水取配水施設等は平成28年に農業土木技術史上価値が高いとされ国の重要文化財に指定されている⁽²⁹⁾。また、取水堰として「笠井堰」が酒津八幡山の南東に設けられた。
(石田・物部・森本)

註

- (1) 加原耕作「四 高梁川の改修」『新修倉敷市史』第八巻 自然・風土・民俗 1996
- (2) 間壁葎子「高梁川下流域の無土器時代遺跡」『倉敷考古館研究集報』第2号 倉敷考古館 1966
- (3) 間壁忠彦・間壁葎子「第三章第二節 貝塚の時代」『新修倉敷市史』第一巻 考古 1996
- (4) 間壁忠彦・間壁葎子「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号 倉敷考古館 1971
- (5) 前掲註(3)
- (6) 間壁葎子「倉敷市酒津一水江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第8号 倉敷考古館 1973
- (7) 間壁忠彦「倉敷市酒津及新屋敷遺跡出土の土器」『瀬戸内考古学』第2号 瀬戸内考古学会 1958
新屋敷遺跡として報告された大量の「酒津式土器」が出土した地点については、水江遺跡内に含まれている。
- (8) 清野謙次『日本原人の研究』岡書院 1925
- (9) 間壁忠彦・間壁葎子「第四章第二節 弥生人の生業」『新修倉敷市史』第一巻 考古 1996
- (10) 間壁忠彦・間壁葎子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号 倉敷考古館 1977
- (11) 小野一臣・間壁忠彦・間壁葎子「岡山県清音村鑄物師谷2号墳出土の土器」『倉敷考古館研究集報』第13号 倉敷考古館 1977
- (12) 高橋護・鎌木義昌・近藤義郎「宮山墳墓群」『岡山県史』第18巻 考古資料 1986
- (13) 藤原好二「行願院裏山古墳測量調査報告」『倉敷埋蔵文化財センター年報4』倉敷埋蔵文化財センター 1997
- (14) 間壁忠彦・間壁葎子「第六章第三節 内陸部の後期古墳」『新修倉敷市史』第一巻 考古 1996
倉敷市教育委員会『倉敷市遺跡地図 倉敷・庄地区』2005
- (15) 岡山県教育委員会『南山城跡 南山明地古墳群 南山明地遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告257 2022
- (16) 岡山大学考古学研究室編『勝負砂古墳調査概報』学生社 2009
- (17) 澤田秀実他『小造山古墳・小塚古墳測量調査報告書』岡山大学大学院社会文化科学研究科他 2014
- (18) 岡山大学大学院社会文化科学研究科『天狗山古墳』岡山大学考古学研究室他 2014
- (19) 岡山大学考古学研究室『二万大塚古墳』二万大塚古墳発掘調査団 2018
- (20) 岡山県教育委員会『前田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告244 2018
- (21) 間壁忠彦「高梁川沖積地と古代の郷」『倉敷の歴史』第1号 1991
- (22) 前掲註(6)
- (23) 安養寺瓦経の研究刊行委員会『安養寺瓦経の研究』1963
- (24) 間壁忠彦・間壁葎子「第八章第一節 仏教遺跡」『新修倉敷市史』第一巻 考古 1996
- (25) 間壁忠彦・間壁葎子「第八章第三節 役所のあとムラのあと」『新修倉敷市史』第一巻 考古 1996
- (26) 加島進「別編 第一章 備中の刀剣」『新修倉敷市史』第二巻 古代・中世 1999
- (27) 前掲註(15)
- (28) 吉原睦「高瀬通しの起点」『図説 倉敷・総社の歴史』株式会社郷土出版 2009
- (29) 小西伸彦「第2章 高梁川改修計画及び用水路計画と組合設立」、樋口輝久「第5章 高梁川東西用水組合の評価と今後に向けて」『高梁川東西用水組合100周年記念誌』高梁川東西用水組合 2019

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

岡山県三大河川の一つである高梁川は、その源を岡山・鳥取県境に接し、岡山県西部を南流し瀬戸内海に注ぐ、県下最大の流域面積を誇る一級河川である。この高梁川と倉敷市・総社市の境界付近で合流する小田川は、県西部を東流する一級河川である。古くからこの合流点付近では、洪水災害が繰り返し起こることが治水上の大きな課題であり、その解決策の一つとして、高梁川と小田川の合流点をより下流部に移動させることが、平成22年10月に高梁川水系河川整備計画で策定された。令和4年3月に変更された整備計画の中で、今回の対象地となる新合流点付近については、堤防を補強することが明記された。

そこで、令和4年4月に国土交通省中国地方整備局岡山河川事務所から、県教育庁文化財課に意見照会があり、それに対し、県文化財課は埋蔵文化財の所在とその保存について、協議を求める旨の回答を行い、事業地の埋蔵文化財の本格的な取扱い協議を始めた。事業地内には、周知の水江遺跡が所在し、倉敷市教育委員会が過去に実施した確認調査の結果、弥生～古代の遺跡が所在することが明らかであるため、県文化財課としては、その保護が重要課題と考え、河川事務所と協議を重ねたが、流域住民の生命財産に関わる重要な堤防補強工事であるため、その拡幅に係る部分について、適切な調査体制と期間を確保することで、やむを得ず記録保存の措置を図ることとした。

以上の経緯を経て、令和4年4月12日付で河川事務所から文化財保護法第94条に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」が提出され、県文化財課は発掘調査の実施を勧告し、記録保存調査は令和4年11月から着手した。

(河合)

第2節 発掘調査及び報告書作成の経過

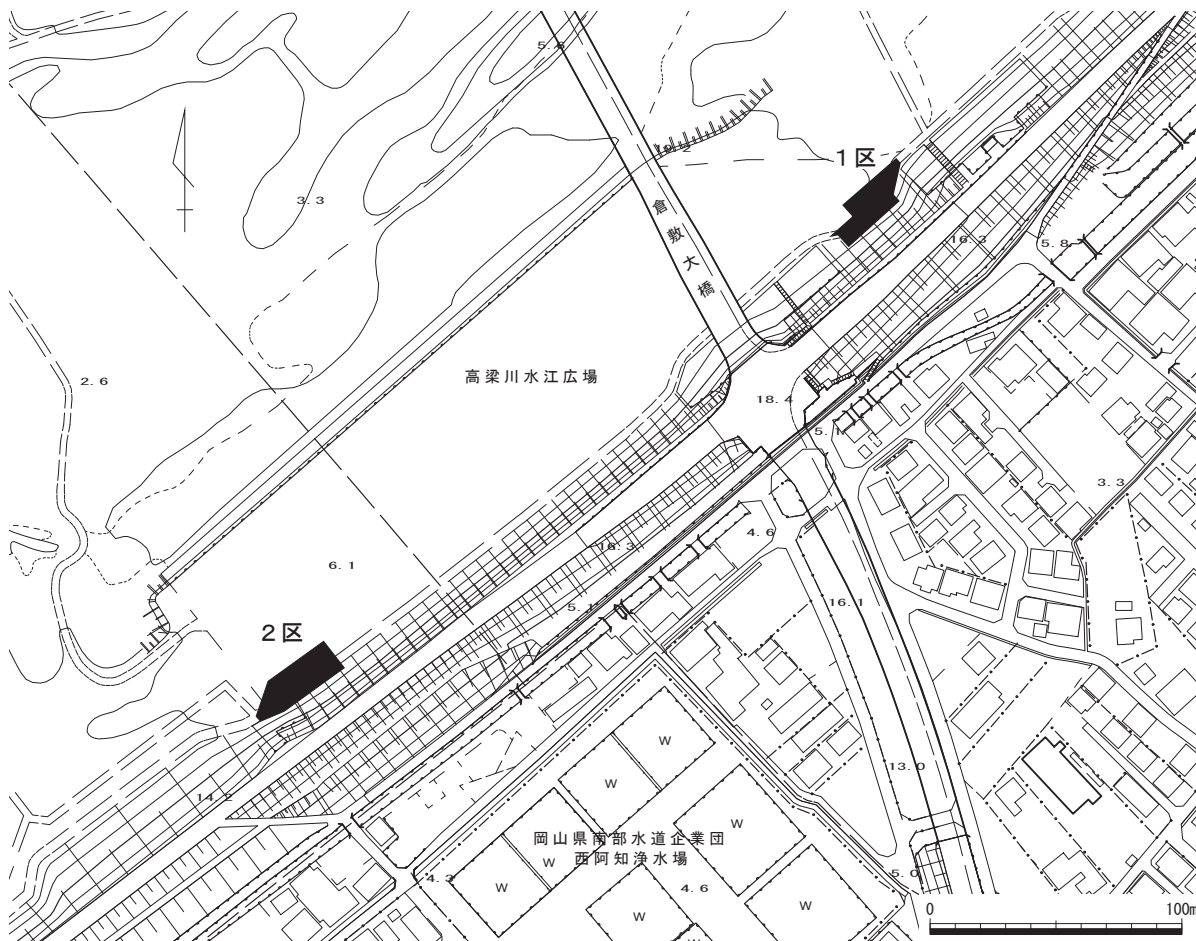
令和4年11月から12月にかけて、調査員7名の2班体制で水江遺跡の発掘調査を実施した。堤防補強工事の影響を受ける部分について調査区を1・2区に分け、1区を1班が、2区を2班が担当して実施し、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。調査面積は1区が300㎡、2区が350㎡の合計650㎡である。

また、埋蔵文化財保護調査指導会を調査開始前と調査期間中に実施し、調査計画や検出した遺構、出土遺物の評価などについて、教示や指導を受けた（令和4年10月、12月の計2回）。

報告書の作成は、令和5年4月から令和6年12月の間に高梁川河川整備事業に伴う倉敷市酒津遺跡の発掘調査と並行して行った。年度毎の体制と担当職員については第4節のとおりであるが、対象とした遺構数は9遺構、遺物数は整理箱に換算して10箱である。

遺物の洗浄・注記作業は、発掘調査事務所及び文化財センターで実施した。遺物実測、トレース、写真撮影、金属製品の処理についても文化財センターで実施し、その一部は整理作業員が担当した。

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過



第4図 調査区配置図 (1/3,000)

図面のトレースは、遺構・遺物ともにデジタルトレースとした。なお、遺構及び遺物写真は、デジタルカメラで撮影している。遺構・遺物のトレース作業が終了次第、割り付けと文章の執筆を随時進めた。なお、報告書全体の編集作業は、従来どおり割り付け用紙を使用して行った。

報告書作成期間中には、埋蔵文化財保護調査指導会において、作業の進捗状況や内容について報告を行い、教示や指導を受けた（令和5年11月、令和6年2月の計2回）。（石田）

第3節 日誌抄

令和4年度

令和4年

- | | |
|-----------|-------------------|
| 10月3日(月) | 発掘調査事業開始 |
| 10月18日(火) | 第1回埋蔵文化財保護調査指導会開催 |
| 11月8日(火) | 1・2区調査開始、重機掘削 |
| 12月15日(木) | 空中写真撮影 |
| 12月20日(火) | 第2回埋蔵文化財保護調査指導会開催 |
| 12月26日(月) | 2区調査終了 |
| 12月27日(火) | 1区調査終了 |

令和5年

2月16日（木） 第3回埋蔵文化財保護調査指導会開催

令和5年度

令和5年

4月3日（月） 報告書作成作業開始

6月26日（月） 岡山理科大学において富岡直人教授による獣骨同定

11月27日（月） 第1回埋蔵文化財保護調査指導会開催

令和6年

2月19日（月） 第2回埋蔵文化財保護調査指導会開催

3月29日（金） 報告書作成作業終了

令和6年度

令和6年

4月1日（月） 報告書作成作業開始

12月20日（金） 報告書作成作業終了

第4節 発掘調査及び報告書作成の体制

令和4年度

岡山県教育委員会

教育長

鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長

浮田信太郎

文化財課

課長

江草 大作

副課長

尾上 元規

総括副参事（埋蔵文化財班長）

河合 忍

副参事

松尾 佳子

主事

金田 涼

岡山県古代吉備文化財センター

所長

大橋 雅也

次長（総務課長事務取扱）

浅野 勝弘

参事（文化財保護担当）

柴田 英樹

〈総務課〉

総括副参事（総務班長）

福池 光修

主幹

井上 裕子

〈調査第一課〉

主幹

石田 為成

（調査担当）

〈調査第二課〉

主事

藤井 雅大

（調査担当）

主事

森本 蓮

（調査担当）

〈調査第三課〉

課長

澤山 孝之

（調査担当）

総括副参事（第一班長）

渡邊恵里子

（調査担当）

主事

間所 克仁

（調査担当・総社市から派遣）

主事

北門幸二郎

（調査担当）

令和5年度

岡山県教育委員会

教育長

鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長

國重 良樹

文化財課

課長

浜原 浩司

副課長

尾上 元規

総括副参事（埋蔵文化財班長）

河合 忍

主任

藤井 翔平

主事

金田 涼

岡山県古代吉備文化財センター

所長

奥山 修司

次長

柴田 英樹

〈総務課〉

課長

福池 光修

副参事

絹輪 桂子

主任

中江 理恵

主任

西山祐太郎

〈調査第一課〉	主 任	藤井 翔平
主 事	主 事	伏見 祐輝
	岡山県古代吉備文化財センター	
〈調査第二課〉	所 長	奥山 修司
総括副参事（第二班長）	次 長	柴田 英樹
	〈総務課〉	
副 参 事	課 長	大藤 淳
	副 参 事	絹輪 桂子
〈調査第三課〉	主 任	中江 理恵
課 長	主 任	中山 早紀
総括副参事（第一班長）	〈調査第一課〉	
	主 事	小林有紀子 （整理担当）
副 参 事	〈調査第二課〉	
	主 事	西村 奏 （整理担当）
主 事	〈調査第三課〉	
	課 長	金田 善敬 （整理担当）
総括主幹（第二班長）	総括副参事（第一班長）	物部 茂樹 （整理担当）
		森本 蓮 （整理担当）
主 事	主 事	
	総括副参事（第二班長）	石田 爲成 （整理担当）
令和6年度	副 参 事	岡本 泰典 （整理担当）
岡山県教育委員会	主 事	四田 寛人 （整理担当）
教 育 長		
岡山県教育庁		
教育次長		
文化財課		
課 長		
副 課 長		
総括副参事（埋蔵文化財班長）		

埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

番号	文書番号 日付	種類及び名称	所在地	目的	通知者	通知日	主な勧告事項
1	教文理 第141号 R4.4.19	集落跡 酒津遺跡・水江遺跡	倉敷市酒津・水江 地先	河川整備	国土交通省中国地方整備局 岡山河川事務所長	R4.4.12	発掘調査

番号	文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第91号 R.4.11.8	集落跡 水江遺跡	倉敷市水江 地先	650	高梁川河川整備 事業	岡山県古代吉備文化財 センター所長	澤山孝之・渡邊恵里子・ 石田為成・藤井雅大・ 間所克仁・北門幸二郎・ 森本蓮	R.4.11.8～ R.5.3.31

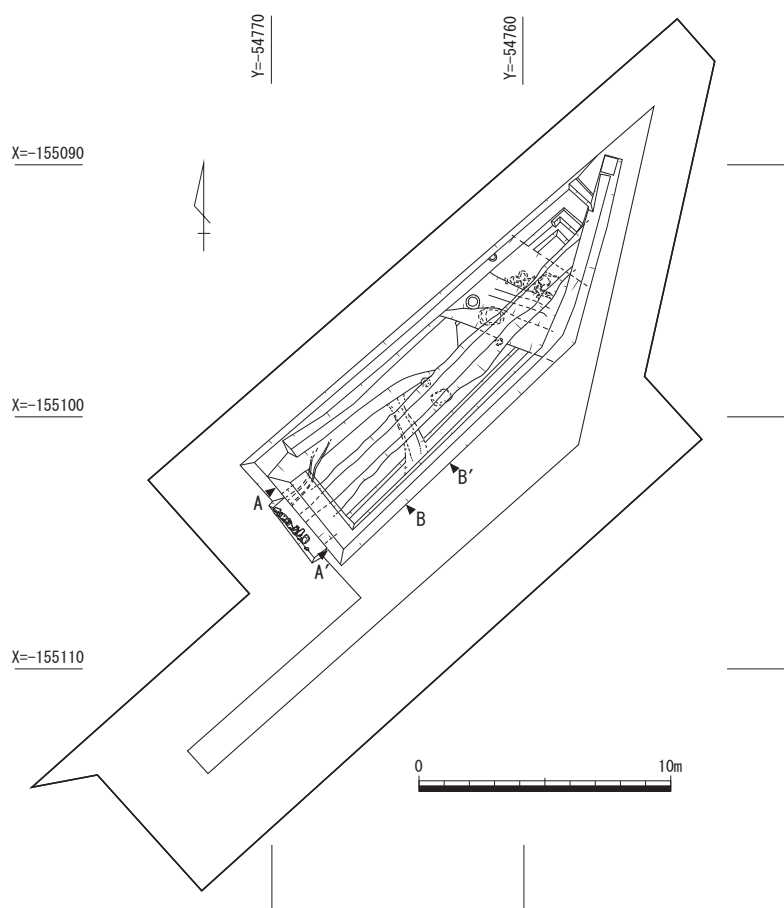
番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文理 第1674号 R4.12.28	縄土石器・弥生土器・土 師器・須恵器・陶器・土 製品・鉄器・銅銭・骨 計整理箱10箱	倉敷市水江 地先 水江遺跡	R4.11.8～ R4.12.27	岡山県教育委員会 教育長	国土交通省	岡山県古代吉備 文化財センター

第3章 発掘調査の成果

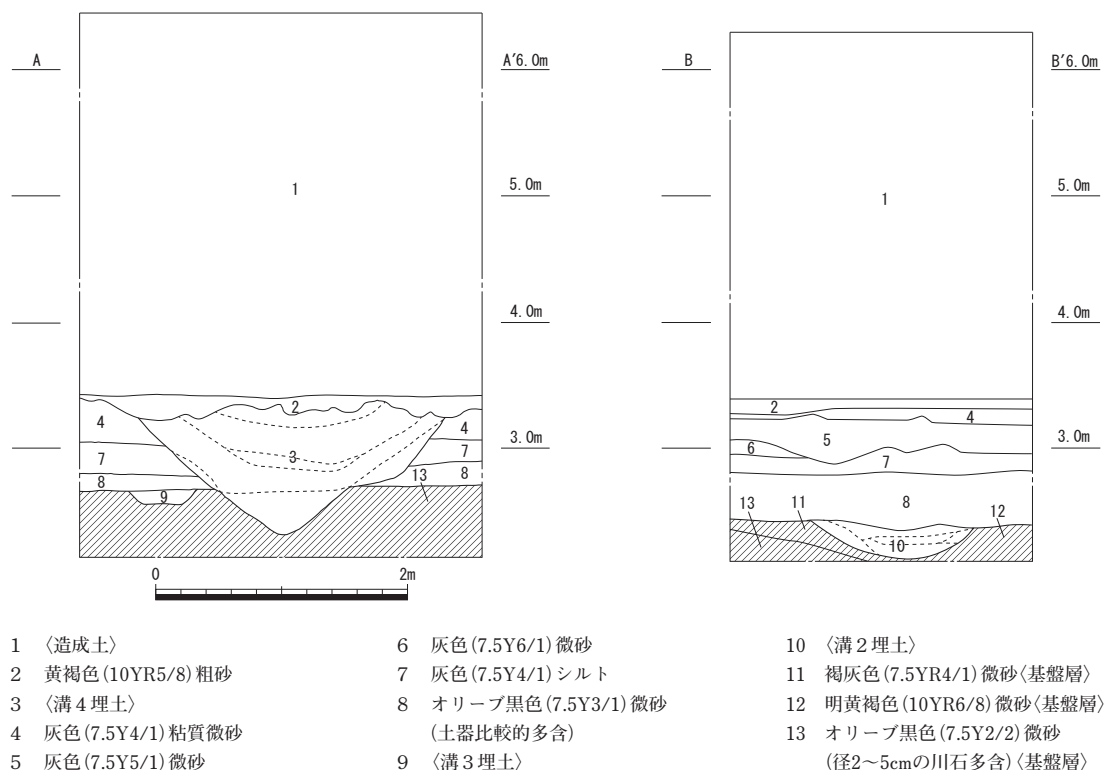
第1節 1区の調査

1 概要

1区周辺は、倉敷市教育委員会による確認調査で、標高2.7mで基盤層、その上標高3.45mまでに古墳時代～中世にわたる3層の包含層が堆積していることが明らかとなっていた。その後グラウンドに造成されていたので、まずは重機により造成土の除去を行ったところ、造成土が標高3.4mまで及び、直下で上層の遺構面を検出した。下層の遺構面は標高2.3～2.5mで、間には砂や礫を多く含む包含層（第6図第4～8層）が堆積し、特に第8層は奈良時代の遺物を比較的多く包含していた。遺構面を形成する基盤層（第6図第11・12層）は南から北へ下がると共に厚みを増し、中央から北では安定した面を形成していたが、調査地南端はその下位に堆積する黒色の礫層（第6図第13層）が露出し、溝以外明確な生活痕跡は見出せなかった。また、黒色の礫層は湧水が激しく、さらにその下方の堆積は確



第5図 1区調査区全体図（1/300）



第6図 1区土層断面図(1/60)

認できなかったが、1区の基盤は2区の黄色の基盤とは異なると考えられる。1区で確認した遺構は、上層で溝2条と柱穴2個、下層で溝3条と土坑2基、柱穴2個である。(渡邊)

2 遺構・遺物

土坑1(第7・8図、図版2・8)

調査区の北東で検出した。平面形は長軸100cm、短軸70cmの楕円形を呈し、断面形は椀状で、検出面からの深さは25cmを測る。埋土は上下2層に分かれ、層間で30cm大の礫を検出した。第1層から高台付杯1が出土しており、土坑は7世紀末～8世紀初頭以降に埋没したと考えられる。(森本)

土坑2(第7・9図、図版3)

調査区の中央に位置し、平面形は長軸85cm、短軸51cmの隅丸方形を呈し、断面形は皿状で検出面からの深さは11cmを測る。埋土は黒褐色粘質土の単層である。出土遺物は細片の土器のみであるが、検出層位が土坑1と同じであるため、7～8世紀と考えられる。(森本)

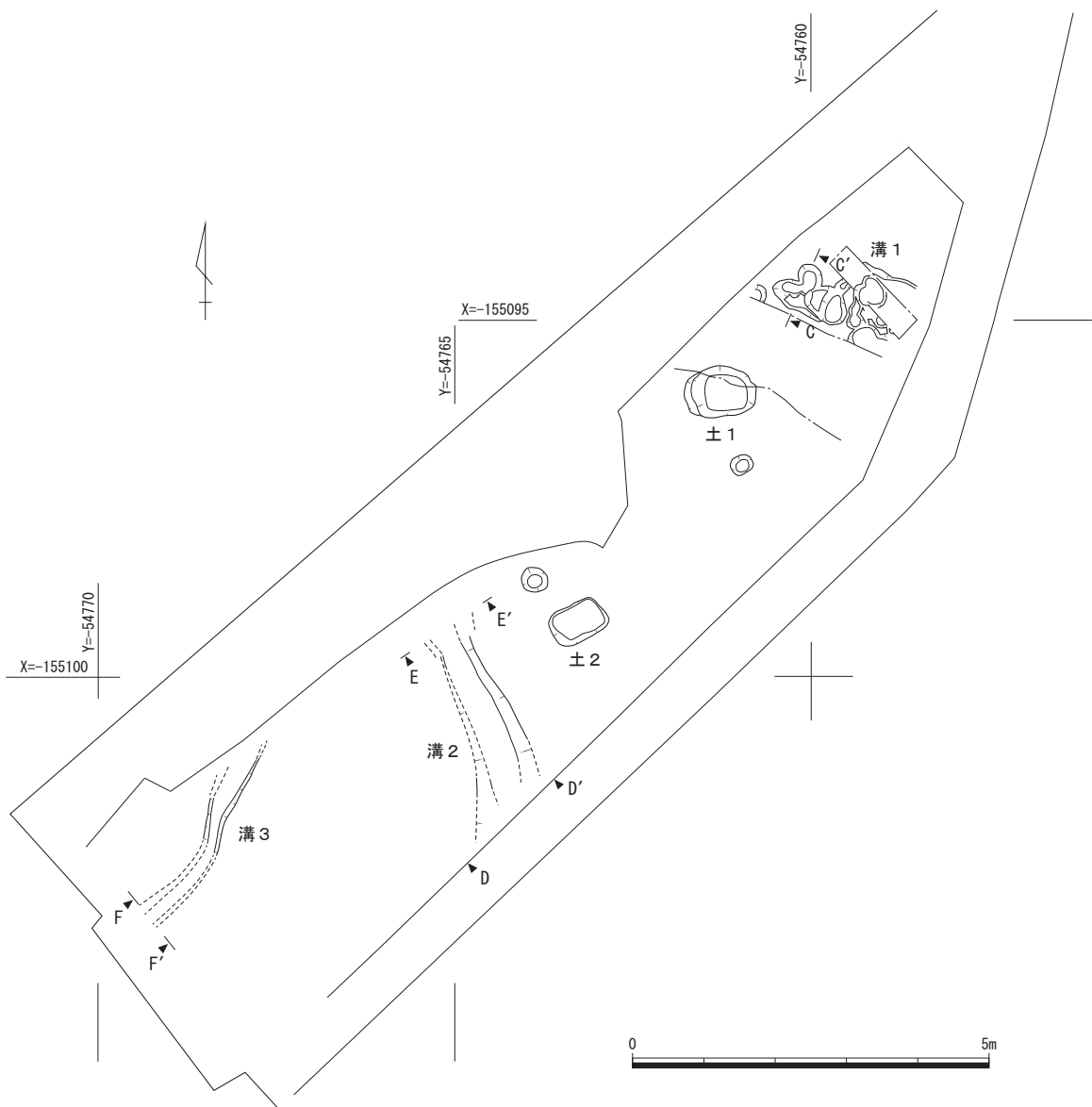
溝1(第7・10図、図版3・8)

土坑1の北東側約1mに位置し、概ね東西方向に延び、西側は窪んでいる。上端幅75cm、底面幅は最大40cmを測る。断面形は椀状で検出面からの深さは22cm、底面標高は2.02～2.06mである。

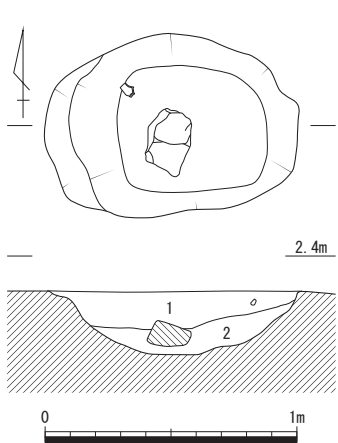
出土遺物は、高杯2と甕3があり、溝は7世紀以降に埋まったと考えられる。(森本)

溝2(第7・10図、図版3)

土坑2の南西約1mに位置し、南北方向に直線的に流走する溝である。上端幅は最大127cm、底面幅は最大24cmを測る。断面形は椀状で検出面からの深さは25cm、底面標高は2.14～2.21mである。時期を特定する遺物はないが、検出層位が土坑1と同じであるため7～8世紀と考えられる。(森本)

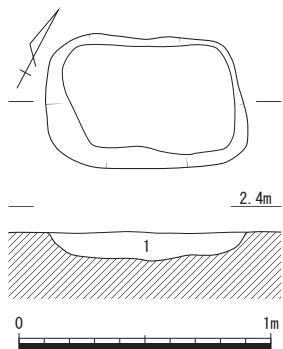
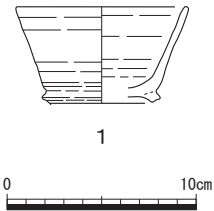


第7図 1区遺構全体図〈下層〉(1/100)



- 1 黒褐色(10YR3/2)粘質土
2 黒褐色(10YR2/2)粘質土
(黄色土粒少混)

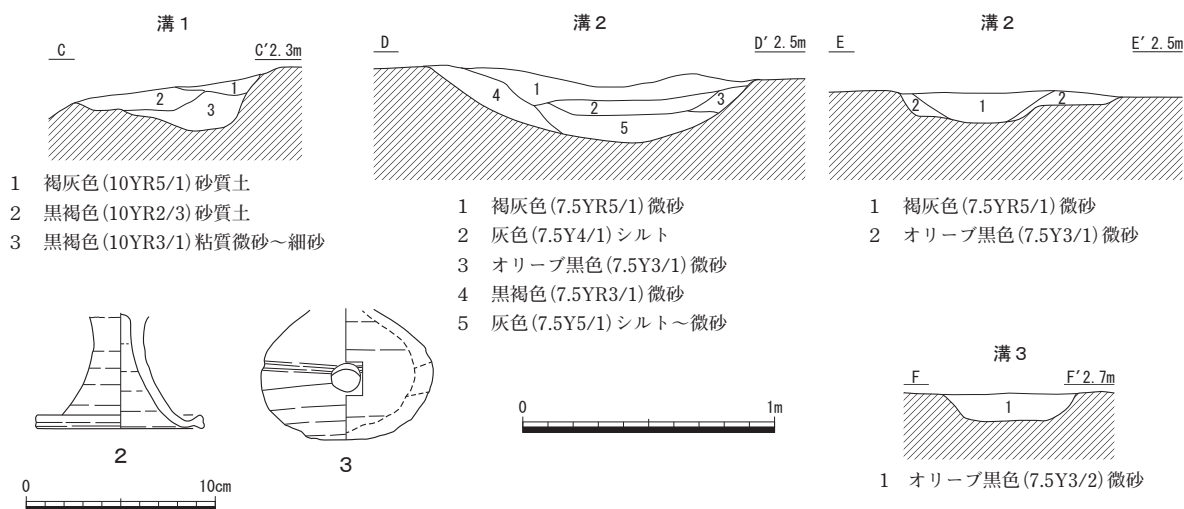
第8図 土坑1・出土土器 (1/30・1/4)



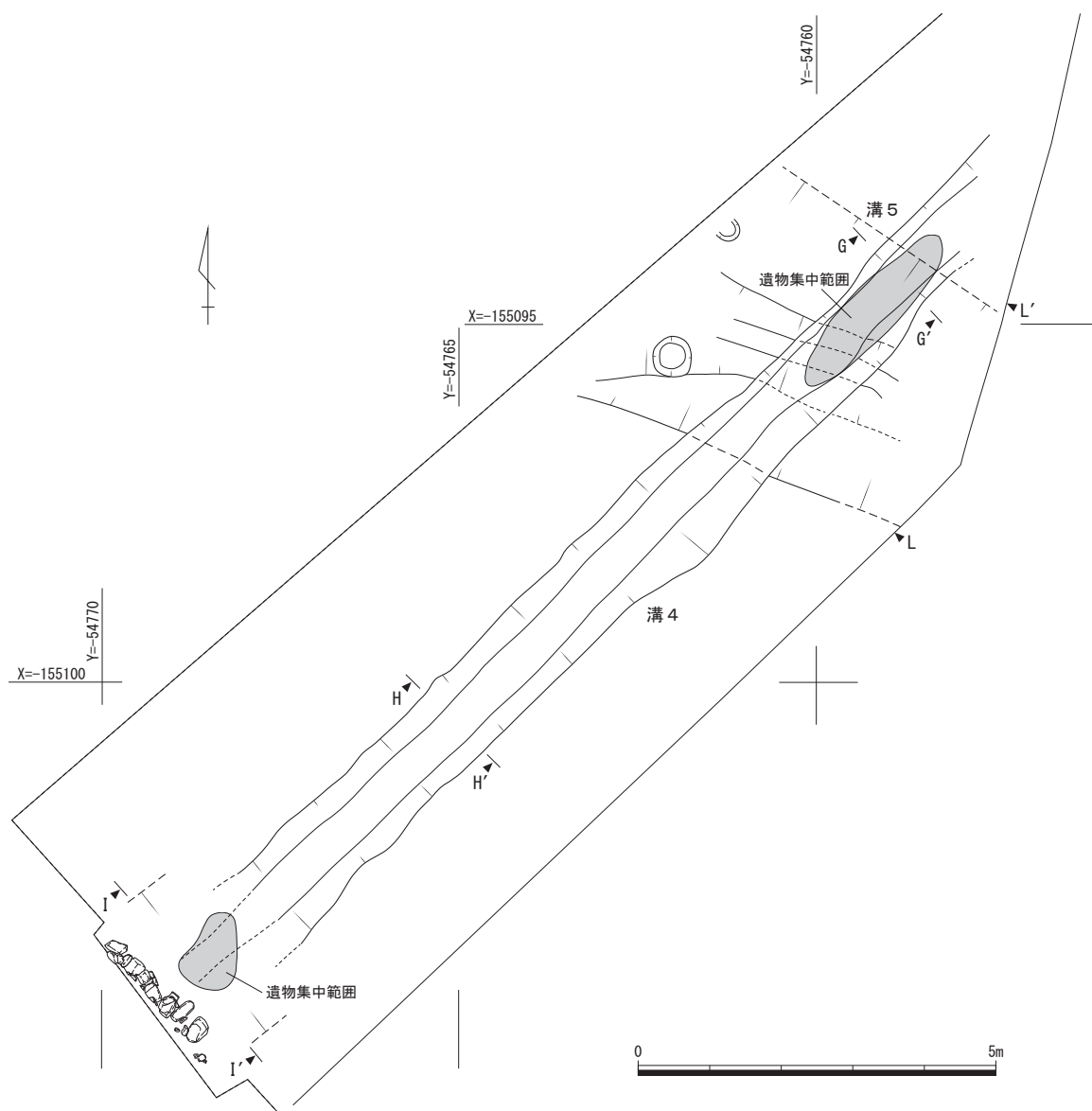
- 1 黒褐色(10YR2/2)粘質土
(下半に2～5cmの黄色土塊多混)

第9図 土坑2 (1/30)

第3章 発掘調査の成果



第10図 溝1・出土遺物、溝2、溝3 (1/30・1/4)



第11図 1区遺構全体図〈上層〉(1/100)

溝3 (第7・10図)

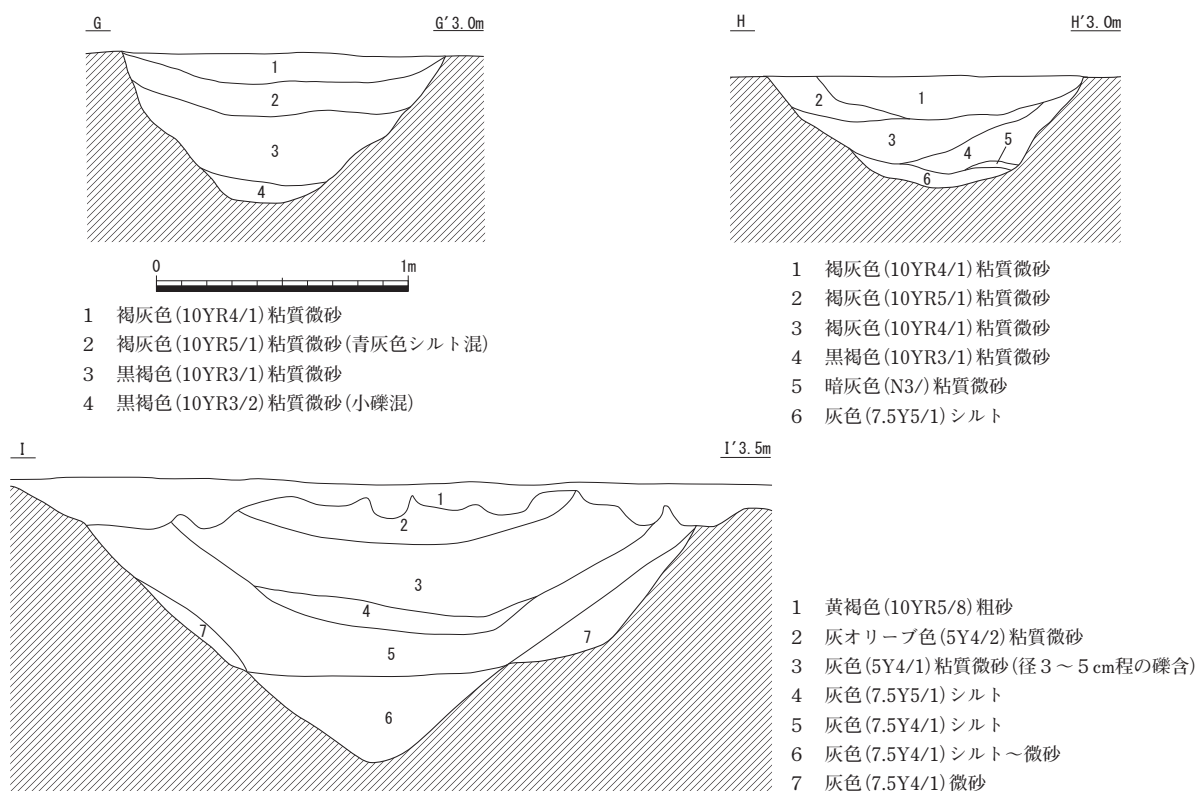
調査区の南西端に位置し、北東から南西方向に延びる浅く狭い溝で、規模は上端幅52cm、底面幅23cm、断面形は皿状で検出面からの深さ10cm、底面標高2.25mを測る。埋土はオリーブ黒色微砂の単層である。出土遺物はなく、検出層位が土坑1と同じであるため7～8世紀と考えられる。(森本)

溝4 (第11～15図、巻頭図版2、図版2・4・5・8・9)

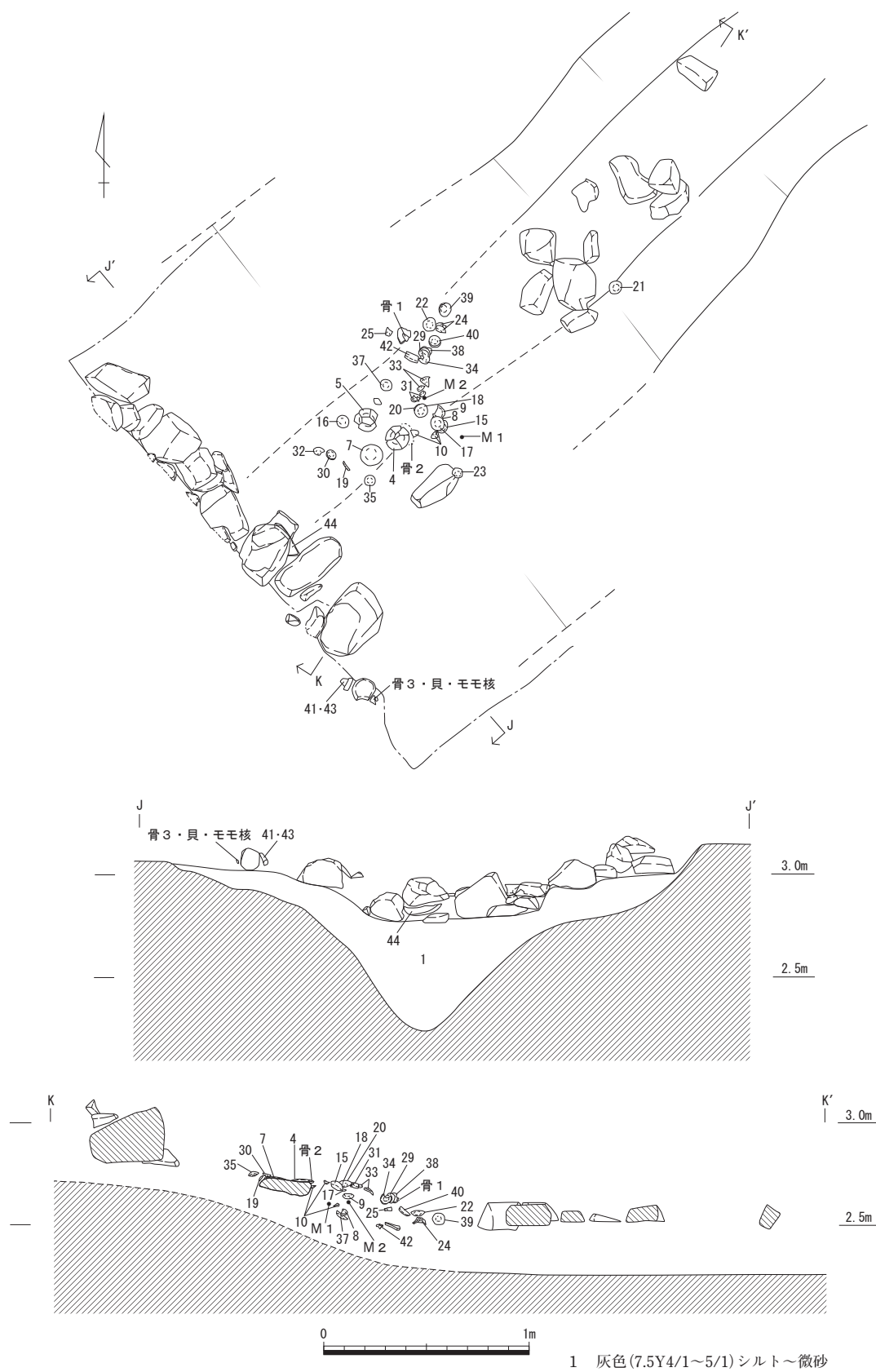
調査区中央に位置し、現堤防に沿うように北東から南西方向、N—45°—Eで直線的に延びる溝である(第11図)。検出面での規模は幅258cm、深さは南西端で110cm、検出長18m以上で調査区外に続くことを確認した。断面形は調査区南西端(I断面)では葉研状だが、北東側では底部が緩くなり椀状になる(G・H断面)。検出面の標高は3.4m、底面の標高は2.30～2.38mで、あまり高低差がない。

また、調査区南西端の溝内で、溝に対して直交する石列を確認した(第13図)。石列は、灰色シルト～微砂が約50cm堆積した後に、20～40cm程度の角礫を二段以上積み上げていた。長さ約2.1mが遺存し、溝を塞ぐように構築されていた。石列北東では石列石材と似た礫や遺物が標高2.5～2.7mにかけてまとまって出土し、土師器小皿の一部は重なり合っていた。これらは石列より南の東側から転落したと考える。石列の間からは備前焼の甕底部44が出土している。

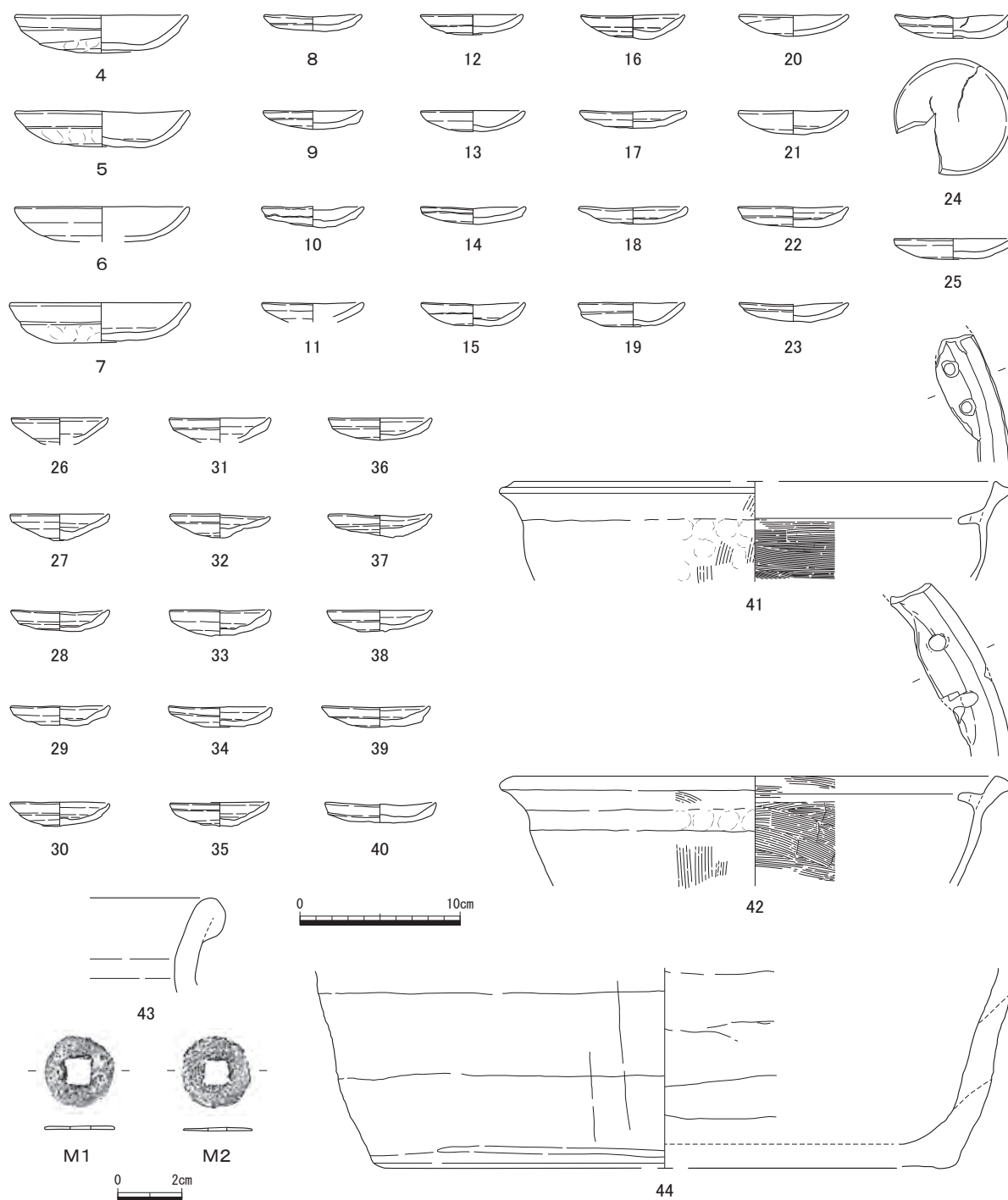
出土遺物は、溝の南西端と北東側のG断面付近で集中して出土した。南西端では土師器皿4～7、土師器小皿8～11・14～25・29～40、瓦質内耳鍋41・42、備前焼の甕43・44、無文銭M1・M2、獣骨(骨1～3)、貝、モモ核が出土した。同定の結果、骨1は脊椎動物門、骨2はウマの大腿骨、骨3は哺乳綱と推定される。貝はアカニシで受熱はない。北東集中部では土師器椀45、瓦質播鉢46・47、瓦質内耳鍋48・50～52が標高2.4～3.4mの間で出土した。下層では讃岐系土師器鍋53が出土した。



第12図 溝4 (1/30)



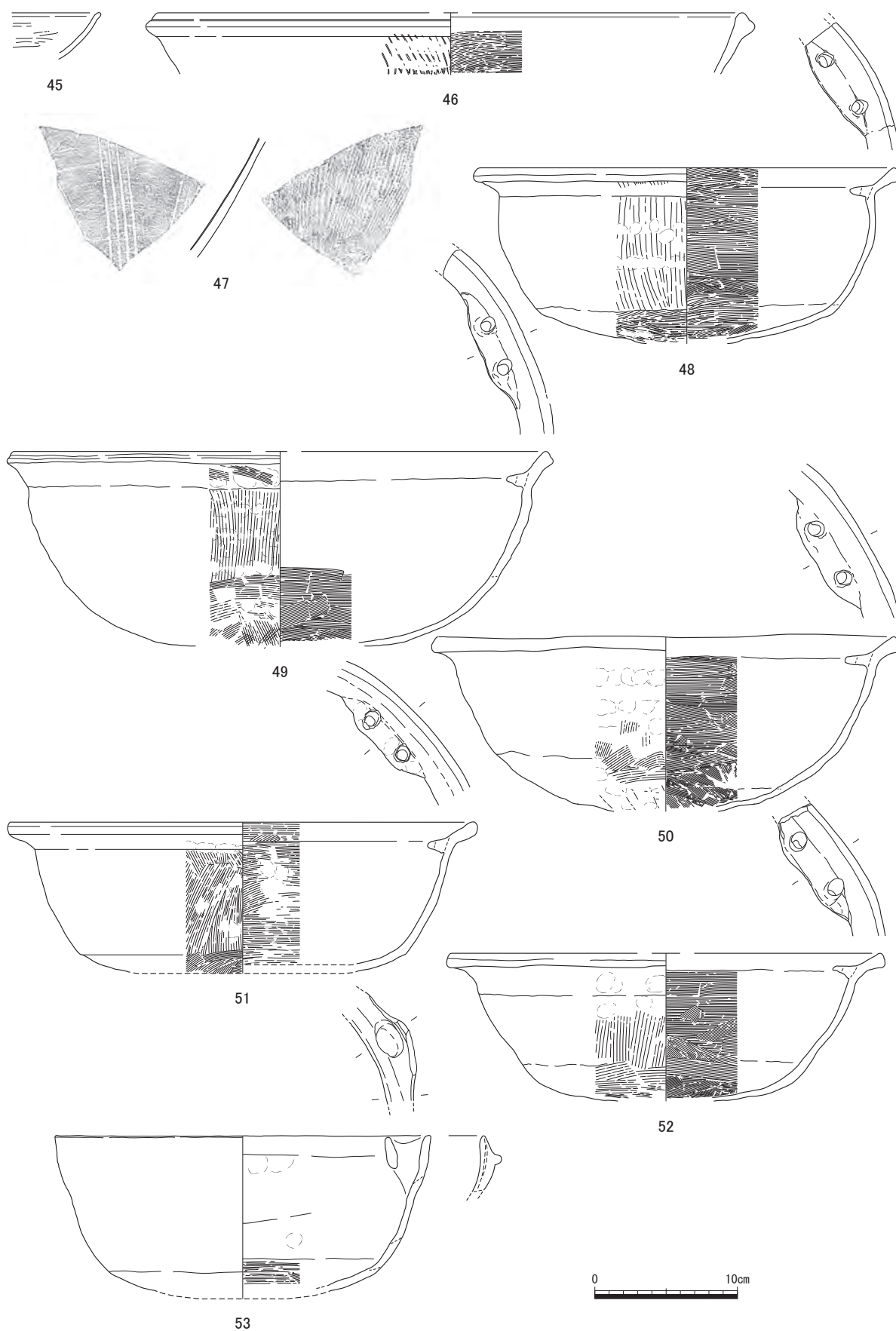
第13図 溝4〈南西部〉(1/30)



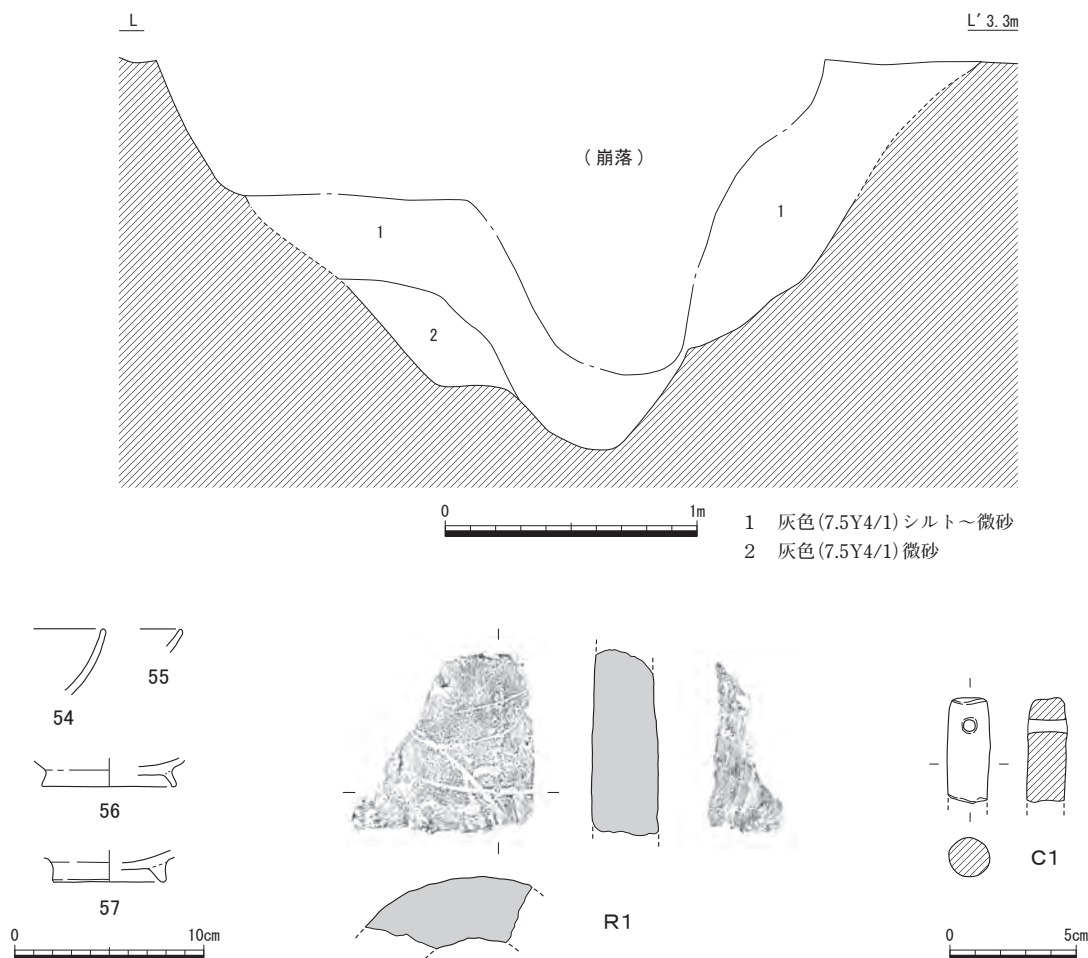
第14図 溝4出土遺物1〈南西部〉(1/4・1/2)

遺物の時期は、南西端で出土した41・42は16世紀前半であり、共に出土した土師器皿も同年代と推測できる。G断面付近で出土した48・50～52は16世紀後半と考えられる。この年代は50～52に付着した煤のAMS年代測定の結果(表9)とも矛盾しない。溝の底付近で出土した51と溝の上層で出土した48～50・52の時期差が認められず、上層と下層の埋没の時期差は小さいと想定できる。以上のことから、この溝は、16世紀前半には機能しており、16世紀後半に埋没したと推定される。

溝4は、屋敷地や館を区画する溝や堀の可能性があり、石列はその一部を埋めた土橋とも考えられる。溝南西端で集中して出土した遺物群は、土橋付近で行われた祭祀に関わる可能性もある。(藤井)



第15図 溝4出土遺物2〈北東部〉(1/4)



第16図 溝5・出土遺物 (1/30・1/4・1/3)

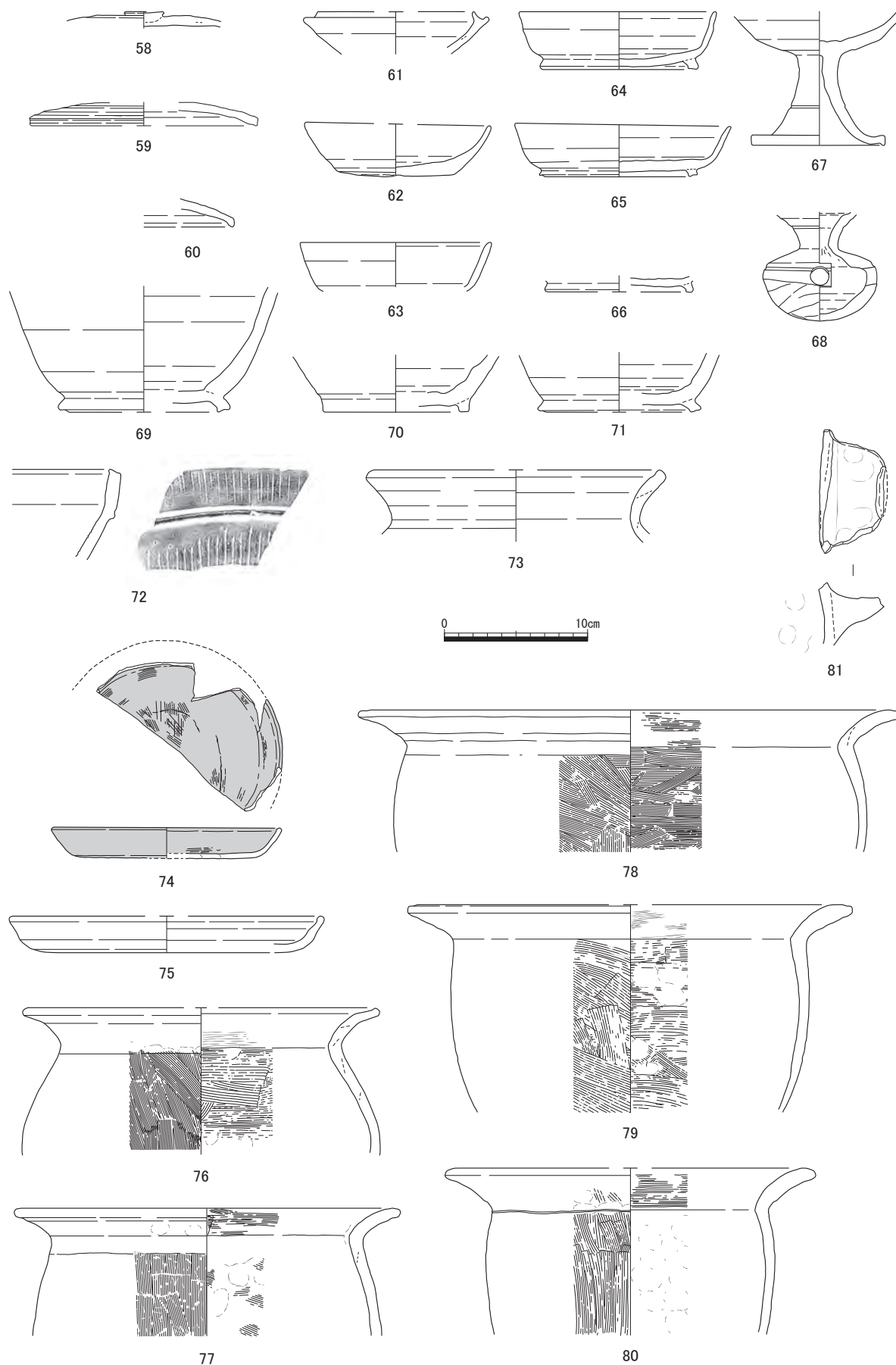
溝5 (第11・16図、巻頭図版2、図版5)

調査区の北東に位置し、北西から南東方向に流走する溝で、溝4に切られる。上端部325cm、底面幅20cmを測る。断面形は碗状で深さ152cm、底面標高は1.62mである。出土遺物は須恵器の碗54と土師器の碗55～57、丸瓦R1、土錘C1があり、55～57は吉備系土師器碗である。時期は、出土遺物や検出層位、溝4との切り合い関係から13～16世紀と推定され、溝4より古い。(森本)

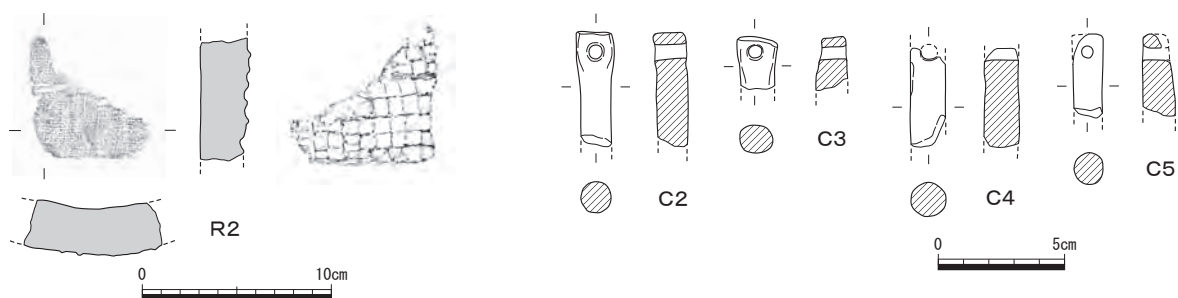
遺構に伴わない遺物 (第17～20図、図版10)

多くは包含層(第6図第4～8層)から出土した遺物で、粗砂や小礫に富み、比較的早い流れの中で堆積したと考えられる。特に第8層から多く出土したが、摩滅は少なく、近隣から流入したと想定される。調査では、機械的にレベルに合わせて水平に掘り進めていたので、第17・18図に標高2.8m以下、第19・20図に標高2.8～3.4mに大きく分けて掲載した。堆積時期を限定するものではないが、おおむね前者が古く、後者に新しい様相が看取できる。

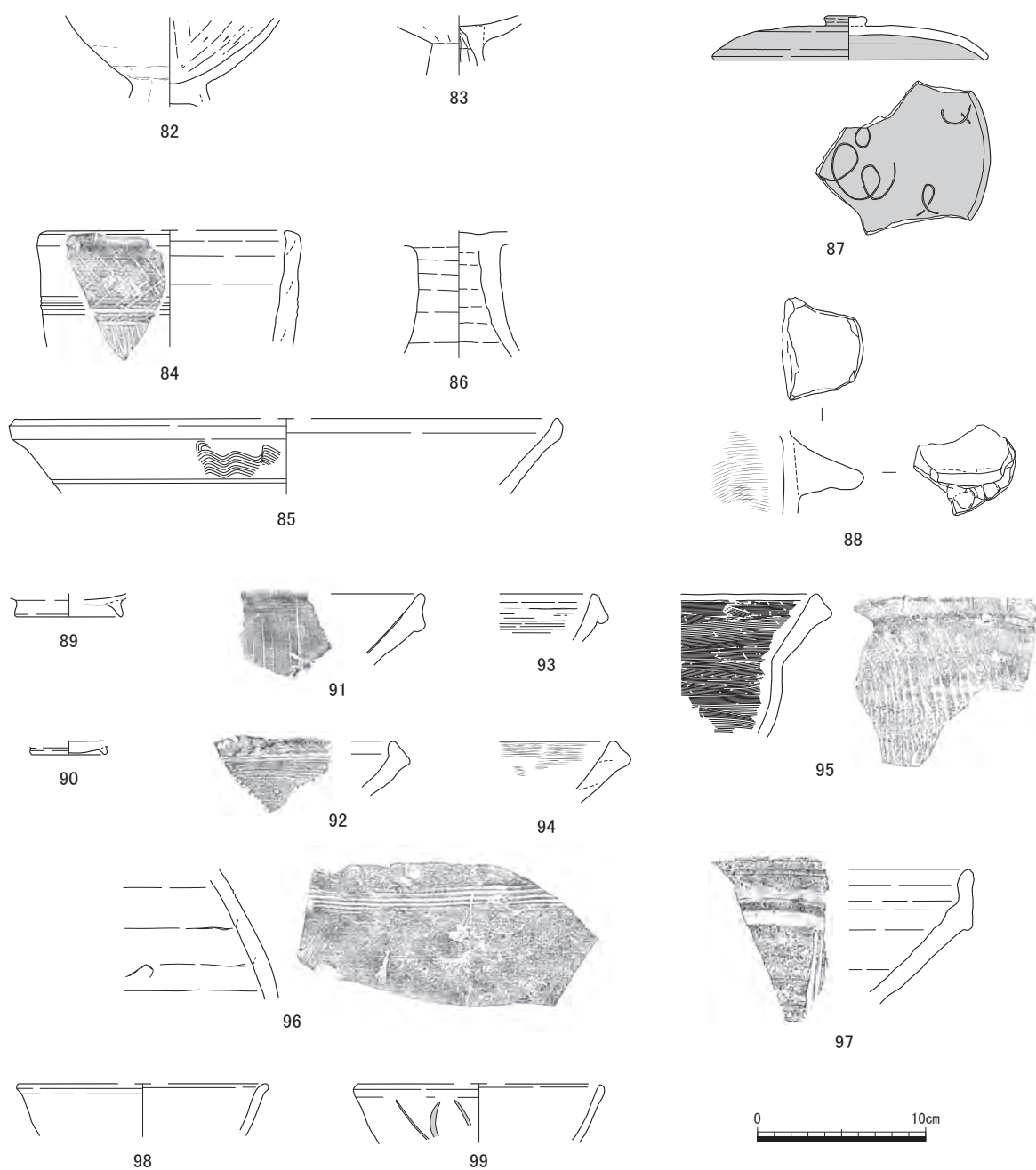
土器のうち、第17図はほとんどが奈良時代に属するものである。須恵器には、ボタン状のつまみのついた杯蓋58やかえりのない杯蓋59・60、立ち上がりが短く径の小さい杯身61、高台のつかない杯62や高台付の杯64～66、高杯67、甕68、壺69～71などがあり、土師器には丹塗りの皿74、甕76～80、甕81などがある。このうち高台付杯65は土坑1西側の調査区壁で出土したもので、土坑1の上部を被



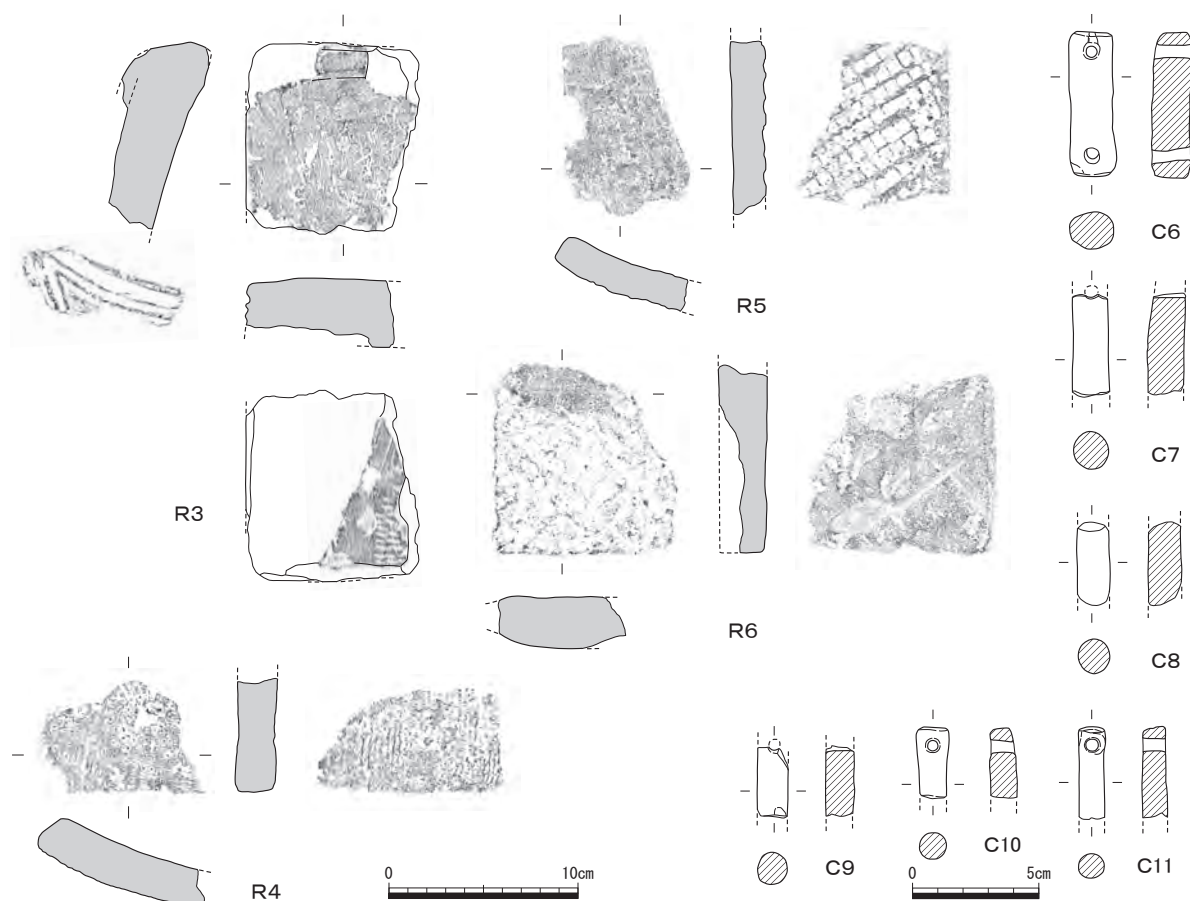
第17図 遺構に伴わない遺物1 (1/4)



第18図 遺構に伴わない遺物2 (1/4・1/3)



第19図 遺構に伴わない遺物3 (1/4)



第20図 遺構に伴わない遺物4 (1/4・1/3)

覆していた堆積層内にあったと確実に言える土器である。土坑1から出土した杯1は7世紀末～8世紀初頭に位置付けられ、整合する。一方、甕68は出土位置とレベルから、溝1に伴う可能性が高い。堆積状況を鑑みて、古墳時代後期の土器は、下層の遺構に伴う可能性がある。

第19図には上位の堆積層の他、側溝や他遺構掘削時に出土した遺物も掲載している。弥生土器82は溝4掘削時に出土した。本調査地で最も古く位置付けられ、黄色の基盤層（第6図第12層）の堆積時期が少なくとも弥生時代中期後半以前に遡る傍証となる。高杯83は脚が中実で杯部と別作りであることから、古墳時代前期と考えられる。87は丹塗り暗文の土師器蓋で、溝4の北東側側溝掘削時に出土した。暗文はらせん状であり、胎土も精良。一般集落からこのような丹塗り土師器が出土するとは考えがたく、後述する瓦R3と合わせて、周辺に公的な施設が存在していたことを示唆する。

一方、吉備系土師器碗や瓦質土器、備前焼、青磁など、中世～近世の土器も出土している。備前焼播鉢97は溝4南端のトレンチ掘削時に出土し、本来は溝4に包含されていた可能性が高い。

瓦R2～6は全て平瓦で、R5が溝4下層から出土した以外、第8層対応層から出土している。R3は軒平瓦で、細片ではあるが内区と外区の境に二重の圈線が認められる。凹面はヘラ削り、凸面は縄目で、平城6663型式と考えられる。ほかは、凹面は全て布目、凸面は、R4が縄目、R2・5は正方形に近い格子タタキ、R6は板状のナデが観察できる。いずれも古代の範疇である。

土錘C2～11は全て棒状土錘で、古墳時代後期～古代にかけて盛行するタイプである。小規模の漁網法への使用が想定される。

(渡邊)

第2節 2区の調査

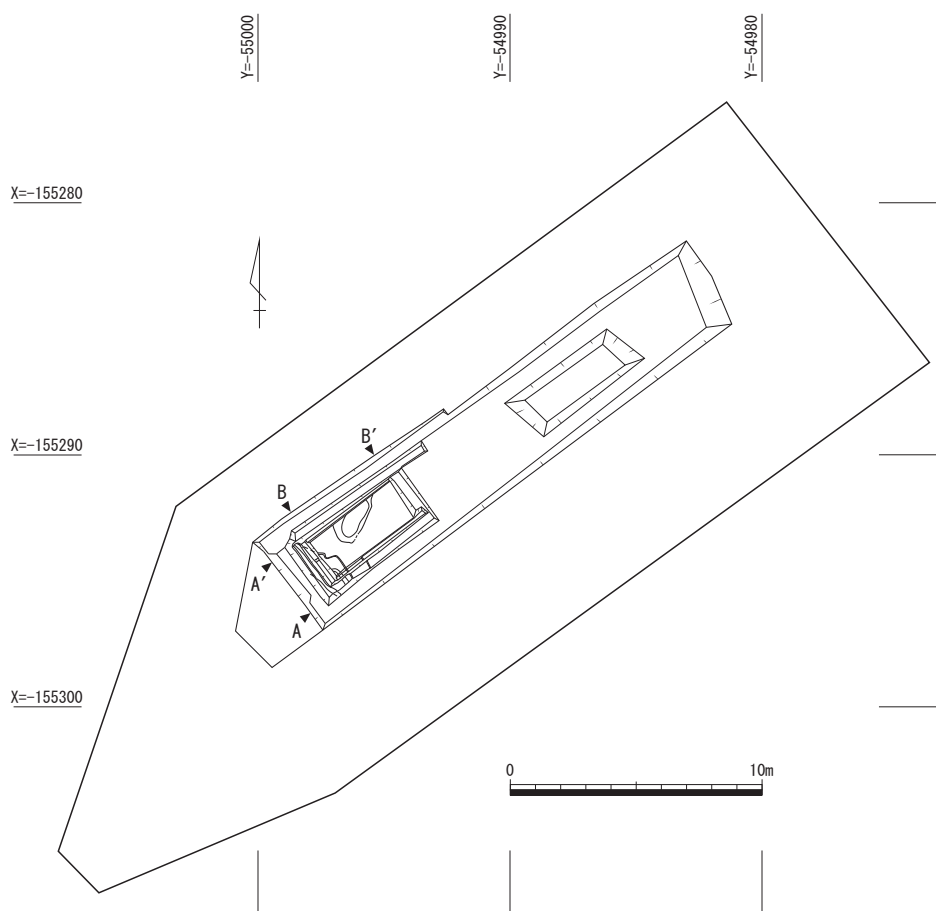
1 概要

2区は1区の下流側、南西に約270mの高梁川東岸堤防沿いの河川敷に位置する。調査地は、かつて高梁川水江広場グラウンドとして利用されており、現地表の標高は約6.9mである。

調査対象範囲は、第21図に示した2区調査区全体図の外枠内になる。倉敷市教育委員会が昭和62年に実施した近辺の確認調査の成果から、遺物包含層の存在が現地表から約4m下がった標高約3m付近に想定された。そこで、上部の造成土や堆積土については、事業者に依頼して標高約3.5m付近まで安全勾配等を確保しながら重機で掘削を行ったところ、調査可能な範囲は内側のほぼ長方形の枠内にとどまった。

標高約3.5m以下については、主に人力で掘り下げを行った。調査区北東側の大部分については、標高約2.6m付近まで掘り下げを行ったが、湧水が激しくなり、調査を続けることができなかった。調査区南西側の一部については、標高約2.4mの基盤層まで掘り下げを行い、遺構を検出した。

第22図に調査区南西壁（A－A'）と北西壁（B－B'）の土層断面図を示した。上部では、整地土や



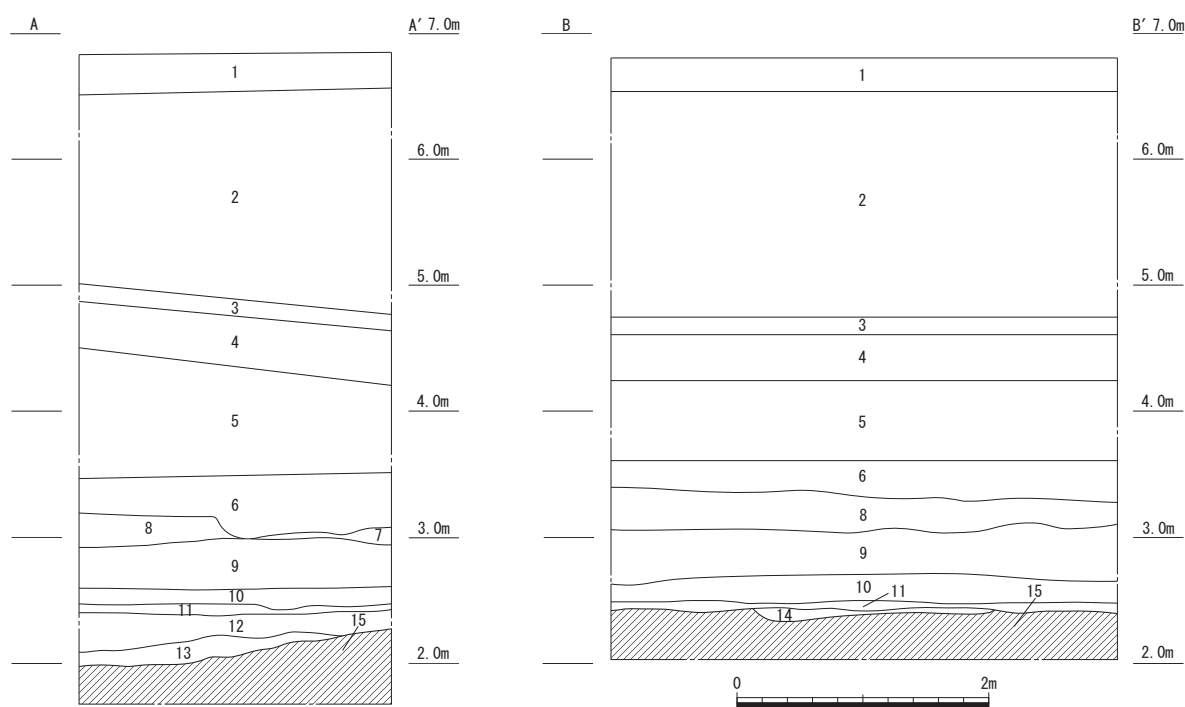
第21図 2区調査区全体図（1/300）

造成土（第1・2層）、広場造成前の地表土や河川堆積土（第3・4層）、一辺が50～100cmの大きな角礫が密に入った堤防の基礎部（第5層）、近代以降の陶器等を含む河川堆積土（第6・7層）を確認



写真1 2区全景（南西から）

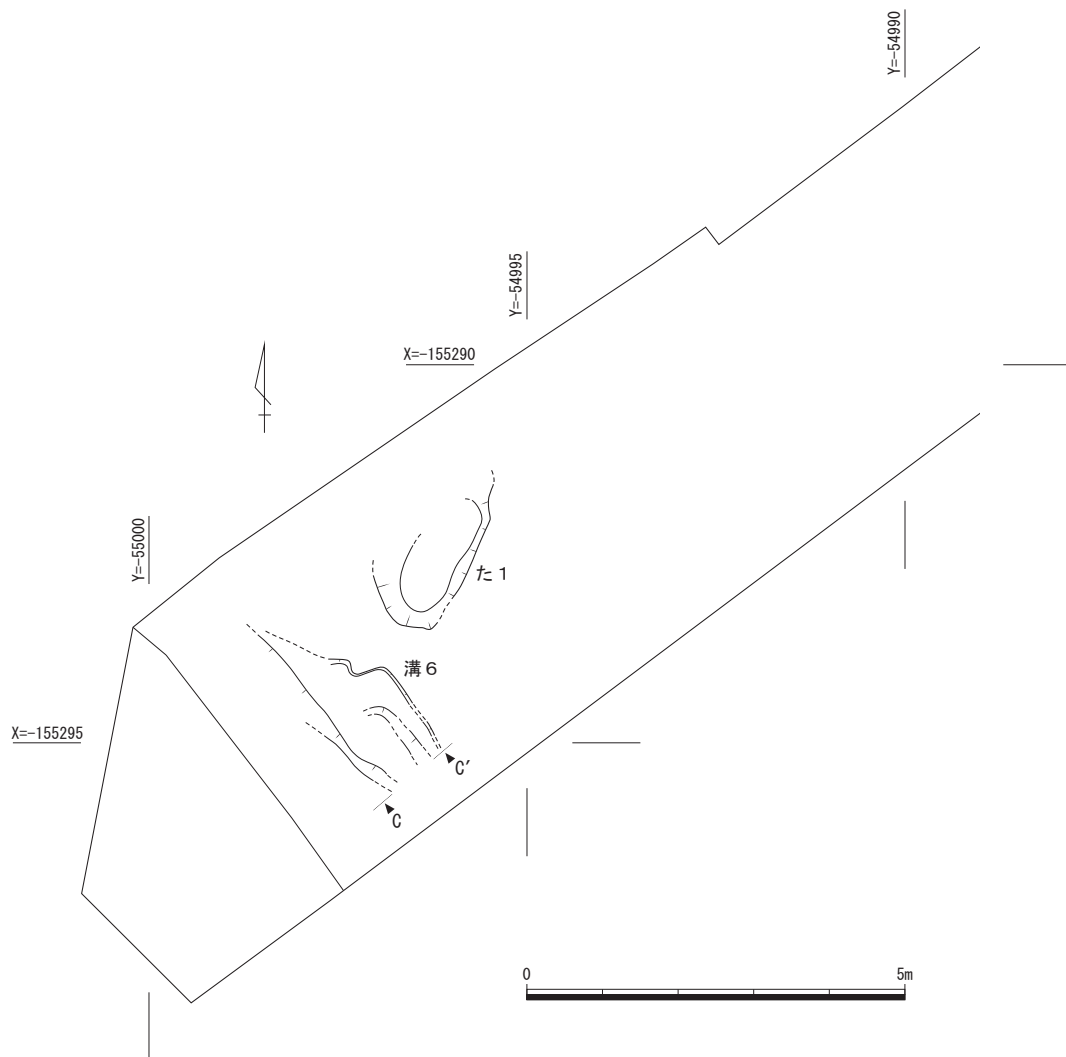
した。標高約2.4～3.2m付近は、グライ化した灰色の細砂やシルトの堆積で、摩滅した中世の土師器片等を少量含んでおり、中世以降の河道堆積土（第8～11層）と考えられる。この河道堆積土の直下、標高約2.4m付近で、にぶい黄色を呈する粘質土の基盤層（第15層）を確認した。調査区南西部では、この基盤層上で縄文時代後期のたわみ1（第14層）と弥生時代後期以降の溝6（第12・13層）を検出した。（石田）



- 1 整地土
- 2 造成土
- 3 にぶい黄橙色(10YR6/3)細砂〈造成前地表土〉
- 4 灰黄褐色(10YR4/2)微砂
- 5 角礫(50～100 cm大)
- 6 橙色(7.5YR6/8)粗砂
- 7 橙色(7.5YR6/6)細砂
- 8 灰色(10Y5/1)細砂〈河道堆積〉

- 9 灰色(10Y4/1)シルト〈河道堆積〉
- 10 灰色(5Y4/1)シルト〈河道堆積〉
- 11 灰オリーブ色(5Y4/2)シルト〈河道堆積〉
- 12 褐灰色(10YR4/1)粘質微砂〈溝6埋土上層〉
- 13 灰黄褐色(10YR4/2)粘質微砂〈溝6埋土下層〉
- 14 灰黄色(2.5Y6/2)粘質微砂 2～10cm大の円礫、炭片、土器片含〈たわみ1埋土〉
- 15 にぶい黄色(2.5Y6/3)粘質微砂〈基盤層〉

第22図 2区土層断面図（1/60）

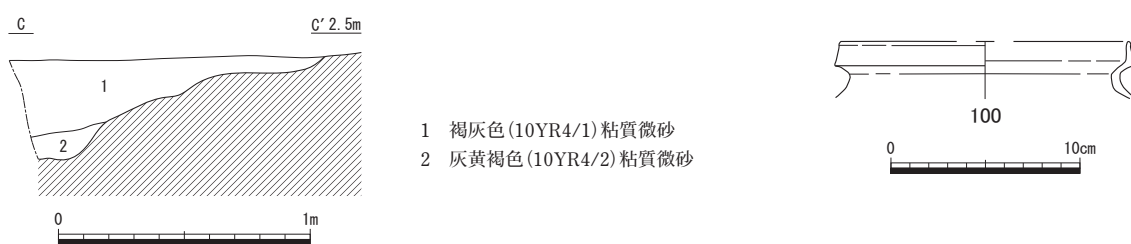


第23図 2区西半全体図 (1/100)

2 遺構・遺物

溝6 (第23・24図、巻頭図版2、図版6～8)

調査区の南西端に位置する。北西から南東方向に流走する溝と考えられ、北東側の肩口のみを検出した。規模は、いずれも検出した範囲で長さ250cm、幅125cm、深さは49cmになる。埋土は上下の2層に分かれ、上層の第1層から弥生土器の甕口縁部100の1点のみが出土した。出土遺物が少なく、詳細な時期は不明であるが、溝は弥生時代後期後半以降に埋没したと考えられる。(石田)



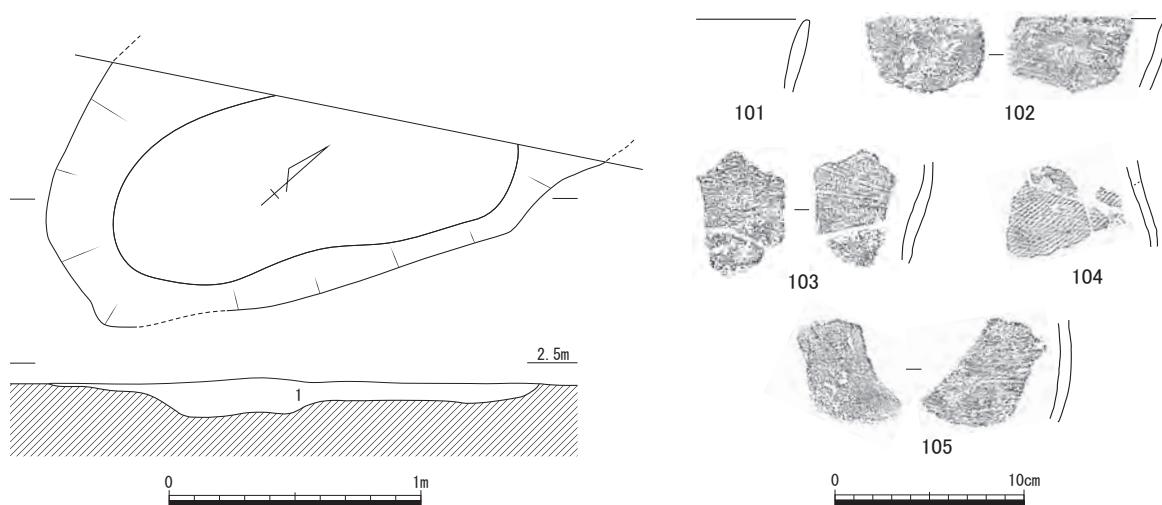
第24図 溝6・出土土器 (1/30・1/4)

たわみ 1（第23・25図、巻頭図版2、図版6～8）

調査区南西部、溝6の北側に近接して位置する。標高2.42mの基盤層上で検出した。平面形は不整な楕円形を呈し、北側部分については調査範囲外に延びる。規模は、検出した範囲で長軸155cm、短軸110cm、深さは14cmを測る。

埋土は単層で、色調は基盤層に近く灰黄色を呈する。埋土中には、木炭片と土器片、2～10cm大の円礫を多く含み、円礫は長軸110cm、短軸100cm程度の半楕円形を呈する範囲に集中して認められた。

出土遺物には縄文土器101～105があり、いずれも無文土器の深鉢や鉢の破片と考えられる。たわみの埋まった時期は、これらの土器の特徴からみて縄文時代後期であろう。なお、埋土から出土した木炭片のAMS年代測定を実施したところ、2σの測定値は1921-1750cal BC（95.4%）で、土器の時期と矛盾のない結果を得た（表9）。（石田）



1 灰黄色(2.5Y6/2)粘質微砂 2～10cm大の円礫、炭片、土器片含

第25図 たわみ 1・出土土器（1/30・1/4）

遺構に伴わない遺物（第26図）

いずれも標高約2.4～3.2mの河道堆積土中からの出土遺物で、第22図に示した2区土層断面図の第8～11層に対応する。

出土遺物はいずれも土器片で、吉備系土師器碗106～109、土師器皿110・111、瓦質土器擂鉢112がある。吉備系土師器碗の底部片108・109は縮小した高台をもつ。土師器皿110の底部は糸切り、111は口径9cm程度に復元される。瓦質擂鉢112は内面に卸目をもつ。これらの土器は、14～16世紀を中心とする時期のものであろう。（石田）



第26図 遺構に伴わない遺物5（1/4）

第4章 総括

今回の水江遺跡の発掘調査では、二つの調査区において、縄文時代から室町時代にかけての遺構や遺物を確認した。1区では、7世紀の溝1条、7～8世紀に属する土坑2基と溝2条、13～16世紀の溝1条、16世紀の溝1条を確認した。1区の南西、約270mに位置する2区では、縄文時代後期のたわみ1基、弥生時代後期以降に埋没したと考えられる溝1条を確認した。

また、今回の調査で、1区は標高2.7m、2区は標高2.4m付近で黄褐色を呈する粘質土の基盤層を検出している。2区では、縄文時代のたわみ1がこの基盤層を掘り込んでおり、基盤層自体は縄文時代後期以前に形成されたと考えられる。倉敷市教育委員会（以下、市教委）が実施した確認調査⁽¹⁾で検出された基盤層上面の標高を基に、旧地形の推定復元を行い第27図に示した⁽²⁾。間壁氏によって示された微高地の想定範囲⁽³⁾にも合致するが、西高梁川の左岸部、酒津八幡山の山裾から南西方向に舌状に延びる微高地の存在が推定される。今回調査を行った2区の北から北西側では、基盤層上面の標高が3m以上の地点が広がり、遺跡の中心部と考えられる。この付近では、弥生時代中期から室町時代にかけての遺物の採集が報告されているが、特に奈良・平安時代の遺物が集中しており⁽⁴⁾、市教委の確認調査においても弥生時代中期、古墳時代初頭、中世の遺構が確認されている。

次に、今回の調査成果及び周辺の状況を時期別に整理して、まとめとしたい。

高梁川河口部周辺の山裾には、縄文時代の遺跡として里木貝塚や西岡貝塚が知られているが、水江遺跡においては、これまで縄文時代の遺構・遺物は確認されていなかった。2区のたわみ1からは縄文時代後期の土器片が出土しており、遺跡の成立時期は、縄文時代後期に遡ることが明らかになった。

弥生時代の遺物は1・2区で出土しており、2区では、弥生時代後期以降に埋没した溝6を確認した。昭和31年の西阿知浄水場濾過池工事の際に多くの酒津式土器が出土し、新屋敷遺跡として報告されている地点は⁽⁵⁾、2区の南東約140mにあり、2区周辺には弥生時代後期以降の集落域の存在が想定される。

古墳時代については、1区で7世紀代の溝を1条確認したほか、包含層中からは古墳時代に属する土師器や須恵器片が出土している。



第27図 水江遺跡旧地形復元図 (1/10,000)

古代の遺構・遺物については1区のみで確認している。土坑1出土の土器は、7世紀末に近い様相を示す。包含層中の遺物については、8世紀のものが主になるが、丹塗り土師器皿74、らせん状暗文を施す土師器杯蓋87、軒平瓦片R3など、一般的な集落では認められない遺物が出土している。これまでも水江遺跡においては、奈良時代の須恵器・土師器・瓦片等が採集され、丹塗りや暗文を施した土師器も含まれている。これらの遺物の存在や遺跡の立地から、古代の公的な施設として、国津あるいは郡津の存在を遺跡内に推定する意見もある⁽⁶⁾。

中世においては、各調査区で鎌倉時代や室町時代の遺物が出土しており、1区では、室町時代の溝2条を確認している。そのうち溝4は、16世紀に機能していた溝で、直線的で一部薬研状の掘り方を持ち、屋敷地を区画する溝か居館を囲む堀の可能性がある。この溝4の直上で確認した石列は、土橋の一部とも考えられるが、調査区境での検出のため全容は不明である。室町時代においては、1区の周辺は安定しており、居住域として利用されていたものと考えられる。

なお、水江遺跡の南約600mには、国指定重要文化財の遍照院三重塔があり、墨書銘から応永23年(1416)の再建であることが明らかになっている。付近では、南北朝～室町時代初期の井戸も確認されており⁽⁷⁾、周辺は西阿知遍照院遺跡として周知されているが、詳細については不明である。文安2年(1445)に摂津国兵庫北関に入港した船に課された関税の台帳である『兵庫北関入船納帳』に記載の船籍地に見える「西宛」は「西阿知」と考えられており、現在の倉敷市西阿知町付近に港や市の存在も推定されている⁽⁸⁾。鎌倉時代以降は、西高梁川による沖積がさらに進み、南方向に微高地が拡大していったと考えられ、水江遺跡も立地する微高地の先端部付近に、これらの港や市が営まれていたのであろう。

水江遺跡については、これまで採集資料や確認調査等による断片的な情報が主で、その様相についてはよく分かっていない。今回も限られた調査範囲の中で、貴重な成果を得ることができたが、遺跡の大部分については、不明なことが多い。遺跡は、高梁川河口部に立地し、各時代において海上や河川の交通・流通の要衝であったと考えられ、これまでも指摘されてきたとおり、古代における津のように、古くから交通・交易に関連する施設が存在していた可能性はかなり高いと思われる。(石田)

註

- (1) 倉敷埋蔵文化財センター『酒津－水江遺跡範囲確認調査 上水島遺跡範囲確認調査』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第16集 2017
- (2) 今回の調査及び市教委による確認調査の結果を参考にすると、弥生時代以降の遺構については、基盤層形成後の堆積土から掘り込まれている。そのため、弥生時代以降の遺構面の標高は、基盤層より高くなるが、基本的には基盤層の地形を反映していると考えられる。
- (3) 間壁忠彦「高梁川沖積地と古代の郷」『倉敷の歴史』第1号 1991
- (4) 間壁葎子「倉敷市酒津－水江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第8号 倉敷考古館 1973
- (5) 間壁忠彦「倉敷市酒津及新屋敷遺跡出土の土器」『瀬戸内考古学』第2号 瀬戸内考古学会 1958
- (6) 前掲註(4)、間壁忠彦・間壁葎子「第八章第三節 役所のあとムラのあと」『新修倉敷市史』第一巻 考古 1996
- (7) 間壁忠彦「熊野神社参道発見の中世井戸」『高梁川』第21号 1967
- (8) 三宅克広「第八章第二節 水運の展開と河口都市・港町の繁栄」『新修倉敷市史』第二巻 古代・中世 1999

表2 土坑一覧

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	時期	旧遺構名
土坑1	楕円形	碗状	100	70	25	2.01	7～8世紀	1区 №6土坑
土坑2	隅丸方形	皿状	85	51	11	2.19	7～8世紀	1区 №7土坑

表3 溝一覧

遺構名	断面形	上端幅 (cm)	底面幅 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	時期	旧遺構名
溝1	碗状	75	22～40	22	2.02～2.06	7世紀～	1区 №4溝
溝2	碗状	56～127	10～24	12～25	2.14～2.21	7～8世紀	1区 №5溝
溝3	皿状	52	23	10	2.25	7～8世紀	1区 №3溝
溝4	薬研状・碗状	128～258	10～20	39～110	2.30～2.38	16世紀	1区 №1溝
溝5	碗状	325	20	152	1.62	13～16世紀	1区 №2溝
溝6	碗状	(125)	(15)	49	1.98～2.27	弥生時代後期～	2区 №1溝

表4 たわみ一覧

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	時期	旧遺構名
たわみ1	不整楕円形	皿状	(155)	(110)	14	2.28	縄文時代後期	2区 №2たわみ

表5 土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調 (外面)	残存状況	形態・手法の特徴等
				口径	底径	器高			
1	土坑1	須恵器	杯	9.0	5.4	5.1	灰 (N6/)	破片	
2	溝1	須恵器	高杯	—	8.6	(5.9)	灰 (N6/)	破片	
3		須恵器	甕	—	—	(6.9)	灰 (N5/) と灰白 (N7/)	破片	
4		土師器	皿	10.6	7.0	2.0	橙 (5YR6/6)	完形	
5	溝4	土師器	皿	10.7	6.1	2.3	にぶい橙 (7.5YR7/4)	完形	
6		土師器	皿	10.8	—	2.2	にぶい橙 (5YR6/4)	破片	
7		土師器	皿	11.2	—	2.5	にぶい黄橙 (10YR7/4)	完形	
8		土師器	小皿	6.0	—	1.1	にぶい褐 (7.5YR6/3)	ほぼ完形	底部回転ヘラ切り後ナデ
9		土師器	小皿	6.1	—	1.2	にぶい橙 (7.5YR7/3)	破片	底部回転ヘラ切り後ナデ
10		土師器	小皿	6.3	—	1.3	橙 (5YR6/6)	完形	底部回転ヘラ切り
11		土師器	小皿	6.3	—	(1.2)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	破片	
12		土師器	小皿	6.3	—	1.3	にぶい橙 (7.5YR6/4)	ほぼ完形	底部回転ヘラ切り後ナデ
13		土師器	小皿	6.4	—	1.3	にぶい橙 (7.5YR7/4)	破片	底部回転ヘラ切り後ナデ
14		土師器	小皿	6.4	—	1.1	にぶい橙 (7.5YR7/4)	破片	底部回転ヘラ切り後ナデ
15		土師器	小皿	6.4	—	1.5	にぶい橙 (7.5YR7/3)	完形	底部回転ヘラ切り後ナデ
16		土師器	小皿	6.4	—	1.6	にぶい橙 (7.5YR7/4)	完形	底部回転ヘラ切り後ナデ
17		土師器	小皿	6.5	—	1.2	にぶい橙 (7.5YR7/3)	完形	底部回転ヘラ切り後ナデ
18		土師器	小皿	6.6	—	1.1	にぶい黄橙 (10YR6/3)	ほぼ完形	底部回転ヘラ切り後ナデ
19		土師器	小皿	6.6	—	1.5	にぶい黄橙 (10YR7/4)	完形	底部回転ヘラ切り後ナデ
20		土師器	小皿	6.7	—	1.4	にぶい褐 (7.5YR6/3)	完形	底部回転ヘラ切り後ナデ
21		土師器	小皿	6.7	—	1.5	にぶい橙 (7.5YR7/3)	完形	底部回転ヘラ切り後ナデ
22		土師器	小皿	6.8	—	1.3	にぶい橙 (7.5YR7/3)	ほぼ完形	底部回転ヘラ切り後ナデ
23		土師器	小皿	6.8	—	1.2	にぶい黄橙 (10YR6/3)	ほぼ完形	底部回転ヘラ切り後ナデ
24		土師器	小皿	7.1	—	1.5	にぶい橙 (7.5YR6/4)	破片	底部回転ヘラ切り、接合痕あり
25		土師器	小皿	7.3	—	1.3	にぶい橙 (7.5YR6/4)	破片	底部回転ヘラ切り後ナデ
26		土師器	小皿	5.9	—	(1.7)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	破片	底部回転ヘラ切り
27		土師器	小皿	6.0	—	1.6	にぶい橙 (7.5YR6/4)	破片	底部回転ヘラ切り

掲載 番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調 (外面)	残存状況	形態・手法の特徴等
				口径	底径	器高			
28	溝 4	土師器	小皿	6.1	—	1.4	にぶい黄橙 (10YR7/3)	ほぼ完形	底部回転ヘラ切り
29		土師器	小皿	6.1	—	1.3	にぶい橙 (5YR7/4)	ほぼ完形	底部回転ヘラ切り
30		土師器	小皿	6.1	—	1.5	にぶい黄橙 (10YR6/3)	ほぼ完形	底部回転ヘラ切り
31		土師器	小皿	6.2	—	(1.5)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	破片	
32		土師器	小皿	6.2	—	1.5	にぶい橙 (7.5YR7/4)	完形	底部回転ヘラ切り
33		土師器	小皿	6.2	—	1.6	にぶい橙 (7.5YR7/4)	破片	底部回転ヘラ切り
34		土師器	小皿	6.2	—	1.3	橙 (5YR6/6)	破片	底部回転ヘラ切り
35		土師器	小皿	6.2	—	1.5	にぶい橙 (7.5YR7/4)	完形	底部回転ヘラ切り
36		土師器	小皿	6.4	—	1.4	にぶい橙 (7.5YR6/4)	破片	底部回転ヘラ切り後ナデ
37		土師器	小皿	6.4	—	1.5	にぶい黄橙 (10YR7/3)	完形	底部回転ヘラ切り後ナデ
38		土師器	小皿	6.6	—	1.3	にぶい橙 (7.5YR6/4)	破片	底部回転ヘラ切り
39		土師器	小皿	6.7	—	1.3	にぶい橙 (7.5YR7/3)	ほぼ完形	底部回転ヘラ切り後ナデ
40		土師器	小皿	7.0	—	1.25	にぶい橙 (7.5YR6/4)	完形	底部回転ヘラ切り後ナデ
41		瓦質土器	鍋	(30.5)	—	(6.2)	灰 (N4/)	破片	
42		瓦質土器	鍋	30.0	—	(6.8)	灰 (N4/)	破片	外面にスス付着
43		備前焼	甕	—	—	(5.9)	灰褐 (7.5YR5/2)	破片	
44		備前焼	甕	—	(35.2)	(12.5)	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	破片	
45		土師器	椀	—	—	(3.3)	灰白 (2.5Y8/1)	破片	吉備系土師器椀
46		瓦質土器	播鉢	(40.8)	—	(4.3)	暗灰黄 (2.5Y4/2)	破片	
47		瓦質土器	播鉢	—	—	(8.4)	灰褐 (7.5YR5/2)	破片	卸目
48		瓦質土器	鍋	29.0	(21.0)	(12.3)	にぶい橙 (5YR6/3)	破片	外面にスス付着
49		瓦質土器	鍋	37.3	—	(13.7)	暗灰 (N3/)	破片	外面にスス付着
50		瓦質土器	鍋	32.0	(23.8)	(12.2)	灰 (5Y4/1)	破片	外面にスス付着、年代測定試料3
51		瓦質土器	鍋	32.0	—	(10.5)	黒 (N1.5/)	破片	外面にスス付着、年代測定試料1
52		瓦質土器	鍋	(30.0)	(17.0)	(10.3)	灰 (N5/)	破片	外面にスス付着、年代測定試料2
53		土師器	鍋	(26.1)	—	(10.9)	にぶい橙 (2.5YR6/4)	破片	讃岐系内耳鍋、外面にスス付着
54	溝 5	須恵器	椀	—	—	(3.5)	黄灰 (2.5Y6/1)	破片	重ね焼き痕
55		土師器	椀	—	—	(1.25)	灰白 (2.5Y8/2)	破片	吉備系土師器椀
56		土師器	椀	—	7.0	(1.5)	浅黄橙 (10YR8/3)	破片	吉備系土師器椀
57		土師器	椀	—	5.8	(1.7)	灰白 (10YR8/2)	破片	吉備系土師器椀
58	遺構に伴わない遺物 1	須恵器	杯蓋	—	—	(1.2)	灰 (N6/)	破片	
59		須恵器	杯蓋	(15.8)	—	(1.6)	灰白 (2.5Y8/1)	破片	
60		須恵器	杯蓋	—	—	(2.0)	灰 (N5/)	破片	
61		須恵器	杯身	(10.9)	—	(3.0)	灰 (N5/)	破片	
62		須恵器	杯	(12.9)	8.9	3.8	灰白 (2.5Y8/1)	破片	
63		須恵器	杯	13.2	—	(3.4)	灰白 (2.5Y8/1)	破片	
64		須恵器	杯	13.6	10.8	4.0	褐灰 (10YR6/1)	破片	
65		須恵器	杯	14.8	10.1	3.7	灰白 (N7/)	破片	
66		須恵器	杯	—	(9.3)	(1.1)	灰 (N5/)	破片	
67		須恵器	高杯	—	9.3	(9.4)	灰 (N6/)	破片	
68		須恵器	甗	—	—	(7.6)	灰 (N6/)	破片	内部に穿孔時の粘土が残存
69		須恵器	壺	—	(10.5)	(8.3)	灰白 (2.5Y7/1)	破片	
70		須恵器	壺	—	9.6	(4.0)	灰白 (N7/)	破片	
71		須恵器	壺	—	(10.0)	(4.1)	灰白 (2.5Y7/1)	破片	
72		須恵器	甕	—	—	(6.5)	オリーブ黒 (7.5Y3/2)	破片	
73		須恵器	甕	(20.0)	—	(5.1)	灰 (N6/)	破片	
74		土師器	皿	15.8	13.0	2.1	にぶい黄橙 (10YR7/3)	破片	内外面に赤色顔料
75		土師器	皿	(21.4)	18.9	2.6	橙 (2.5YR6/6)	破片	

掲載 番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調 (外面)	残存状況	形態・手法の特徴等
				口径	底径	器高			
76	遺構に伴わない遺物 1	土師器	甕	(24.4)	—	(10.3)	橙 (5YR7/6)	破片	
77		土師器	甕	26.6	—	(8.9)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	破片	
78		土師器	甕	36.3	—	(9.9)	灰白 (10YR8/2)	破片	
79		土師器	甕	(31.0)	—	(14.5)	灰黄褐 (10YR6/2)	破片	
80		土師器	甕	(26.0)	—	(11.7)	橙 (7.5YR6/6)	破片	
81		土師器	甗	—	—	(4.4)	橙 (5YR7/6)	破片	把手のみ
82	遺構に伴わない遺物 3	弥生土器	台付鉢	—	—	(5.3)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	破片	
83		土師器	高杯	—	—	(3.6)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	破片	
84		須恵器	壺	(14.0)	—	(6.9)	暗灰 (N3/)	破片	外面にへう描き文
85		須恵器	甕	(32.2)	—	(4.5)	灰黄 (2.5Y6/2)	破片	外面に波状文
86		須恵器	高杯	—	—	(7.4)	灰白 (10YR8/1)	破片	
87		土師器	杯蓋	16.1	—	2.6	にぶい黄橙 (10YR7/3)	破片	内面に暗文、内外面に赤色顔料
88		土師器	竈か甗	—	—	(5.0)	灰黄 (2.5Y7/2)	破片	把手のみ
89		土師器	碗	—	6.2	(1.4)	灰白 (2.5Y8/1)	破片	吉備系土師器碗
90		土師器	碗	—	4.4	(0.8)	灰白 (2.5Y8/1)	破片	吉備系土師器碗
91		瓦質土器	搦鉢	—	—	(4.2)	橙 (5YR6/6)	破片	卸目、亀山系
92		瓦質土器	搦鉢	—	—	(3.3)	褐灰 (10YR5/1)	破片	亀山系
93		瓦質土器	搦鉢	—	—	(2.9)	灰 (N5/)	破片	
94		瓦質土器	搦鉢	—	—	(3.7)	褐灰 (10YR5/1)	破片	
95		瓦質土器	鍋	—	—	(8.6)	褐灰 (10YR5/1)	破片	外面にスス付着
96		備前焼	甕	—	—	(8.3)	灰赤 (2.5YR4/2)	破片	
97		備前焼	搦鉢	—	—	(7.5)	灰褐 (5YR4/2)	破片	卸目
98		青磁	碗	(14.8)	—	(3.1)	灰オリーブ (7.5Y5/3)	破片	
99		青磁	碗	(14.4)	—	(3.5)	オリーブ灰 (10Y6/2)	破片	外面に蓮弁文
100	溝 6	弥生土器	甕	(15.3)	—	(3.0)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	破片	
101	たわみ 1	縄文土器	鉢	—	—	(3.9)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	破片	調整：内面ナデか、外面ナデか
102		縄文土器	鉢	—	—	(3.7)	黒褐 (2.5Y3/1)	破片	調整：内面ナデ、外面ナデ
103		縄文土器	深鉢	—	—	(5.4)	灰黄褐 (10YR6/2)	破片	調整：内面ミガキか、外面ミガキか
104		縄文土器	鉢	—	—	(4.6)	灰黄褐 (10YR4/2)	破片	文様：縄文 (LR) 調整：内面ナデ、外面巻貝条痕
105		縄文土器	深鉢	—	—	(5.4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	破片	調整：内面ミガキか、外面条痕か
106	遺構に伴わない遺物 5	土師器	碗	—	—	(3.3)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	破片	吉備系土師器碗
107		土師器	碗	—	—	(3.6)	浅黄橙 (10YR8/4)	破片	吉備系土師器碗
108		土師器	碗	—	4.1	(1.0)	灰白 (2.5Y8/2)	破片	吉備系土師器碗
109		土師器	碗	—	4.1	(1.2)	灰白 (2.5Y8/2)	破片	吉備系土師器碗
110		土師器	皿	—	5.2	(0.9)	灰黄 (2.5Y7/2)	破片	底部糸切り
111		土師器	皿	(9.2)	7.0	(1.5)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	破片	
112		瓦質土器	搦鉢	—	—	(4.0)	灰白 (2.5Y8/1)	破片	卸目

表 6 瓦観察表

掲載 番号	遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	色調 (外面)	残存 状況	形態・手法の特徴等
			最大長	最大幅	最大厚				
R 1	溝 5	丸瓦	(10.0)	(9.0)	(3.5)	(283.3)	淡黄 (2.5Y8/3)	破片	凸面：ナデ?、凹面：布目?
R 2	遺構に伴わない遺物 2	平瓦	(6.6)	(7.2)	(2.6)	(125.7)	灰白 (2.5Y8/1)	破片	凸面：格子タタキ、凹面：布目
R 3	遺構に伴わない遺物 4	軒平瓦	(9.0)	(10.1)	(3.5)	(462.6)	灰白 (N7/)	破片	瓦当：圏線、凸面：縄目タタキ、凹面：ヘラケズリ
R 4		平瓦	(6.1)	(9.4)	(2.2)	(172.4)	褐灰 (7.5YR6/1)	破片	凸面：縄目タタキ、凹面：布目、凸面に煤付着
R 5		平瓦	(9.6)	(7.7)	(1.8)	(169.6)	灰白 (2.5Y8/2)	破片	凸面：格子タタキ、凹面：布目
R 6		平瓦	(10.1)	(9.7)	(2.6)	(244.7)	灰白 (2.5Y8/2)	破片	凸面：ナデ、凹面：布目

表7 土製品観察表

掲載 番号	遺構名	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	色調 (外面)	残存 状況	形態・手法の特徴等
			最大長	最大幅	最大厚	孔径				
C 1	溝 5	土鍾	(42.1)	16.0	15.5	4.8	(14.3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	破片	棒状
C 2	遺構に伴わない遺物 2	土鍾	(45.1)	15.7	13.0	5.1	(10.4)	明褐 (7.5YR5/8)	破片	棒状
C 3		土鍾	(20.5)	14.7	11.3	5.5	(4.1)	オリーブ褐 (2.5Y4/4)	破片	棒状
C 4		土鍾	(39.0)	14.1	14.3	—	(8.6)	にぶい黄燈 (10YR6/3)	破片	棒状、穿孔一部残存
C 5		土鍾	(33.7)	11.6	12.7	4.4	(5.3)	橙 (7.5YR6/6)	破片	棒状
C 6	遺構に伴わない遺物 4	土鍾	57.7	17.5	15.7	4.3	19.5	にぶい黄燈 (10YR7/2)	完形	棒状
C 7		土鍾	(41.4)	14.0	14.7	—	(11.4)	にぶい黄燈 (10YR7/3)	破片	棒状、穿孔僅かに残存
C 8		土鍾	(33.6)	13.3	13.4	—	(7.1)	にぶい黄燈 (10YR6/3)	破片	棒状、穿孔残存せず
C 9		土鍾	(28.0)	12.5	12.3	—	(5.6)	にぶい黄燈 (10YR6/3)	破片	棒状、穿孔僅かに残存
C 10		土鍾	(28.2)	11.0	10.8	3.6	(4.7)	にぶい橙 (5YR6/3)	破片	棒状
C 11		土鍾	(36.9)	10.4	9.9	5.6	(5.5)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	破片	棒状

表8 金属製品観察表

掲載 番号	遺構名	器種	材質	計測値 (mm)		重量 (g)	残存状況	備考
				最大径	最大厚			
M 1	溝 4	銭	銅	22.5	1.1	1.5	完形	無文銭
M 2		銭	銅	22.1	1.0	1.8	完形	無文銭

表9 年代測定試料一覧表

試料					前処理	測定番号
番号	調査区・遺構名	状況	重量 (g)	推定年代		
1	1区 溝 4	土鍋 (掲載番号51) 付着物 (煤)	1.6805	室町時代	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L)	PLD-50061
2	1区 溝 4	土鍋 (掲載番号52) 付着物 (煤)	0.9769	室町時代	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L)	PLD-50060
3	1区 溝 4	土鍋 (掲載番号50) 付着物 (煤)	2.043	室町時代	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L)	PLD-50059
4	2区 たわみ1	炭化物 (木炭)	55.8329 (土込み)	縄文時代 後期	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L)	PLD-50062
番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正無年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
1	-24.69 $\pm$ 0.17	308 $\pm$ 20	313 $\pm$ 19	315 $\pm$ 20	1522-1576calAD (55.8%) 1625-1638calAD (12.4%)	1500-1600calAD (75.7%) 1615-1645calAD (19.7%)
2	-25.11 $\pm$ 0.13	318 $\pm$ 20	316 $\pm$ 19	315 $\pm$ 20	1521-1580calAD (55.7%) 1623-1637calAD (12.5%)	1499-1600calAD (76.2%) 1615-1644calAD (19.3%)
3	-24.88 $\pm$ 0.14	335 $\pm$ 20	337 $\pm$ 19	335 $\pm$ 20	1500-1526calAD (20.7%) 1556-1600calAD (34.4%) 1615-1632calAD (13.2%)	1483-1530calAD (30.2%) 1538-1636calAD (65.3%)
4	-26.21 $\pm$ 0.14	3536 $\pm$ 23	3516 $\pm$ 23	3515 $\pm$ 25	1889-1872calBC (14.0%) 1846-1815calBC (27.8%) 1805-1775calBC (26.5%)	1921-1750calBC (95.4%)

※本表は、文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施したAMS年代測定の成果の一部である。

1 1区下層全景
(北西上空から)



2 1区下層北半全景
(北西上空から)



3 1区下層南半全景
(北西上空から)

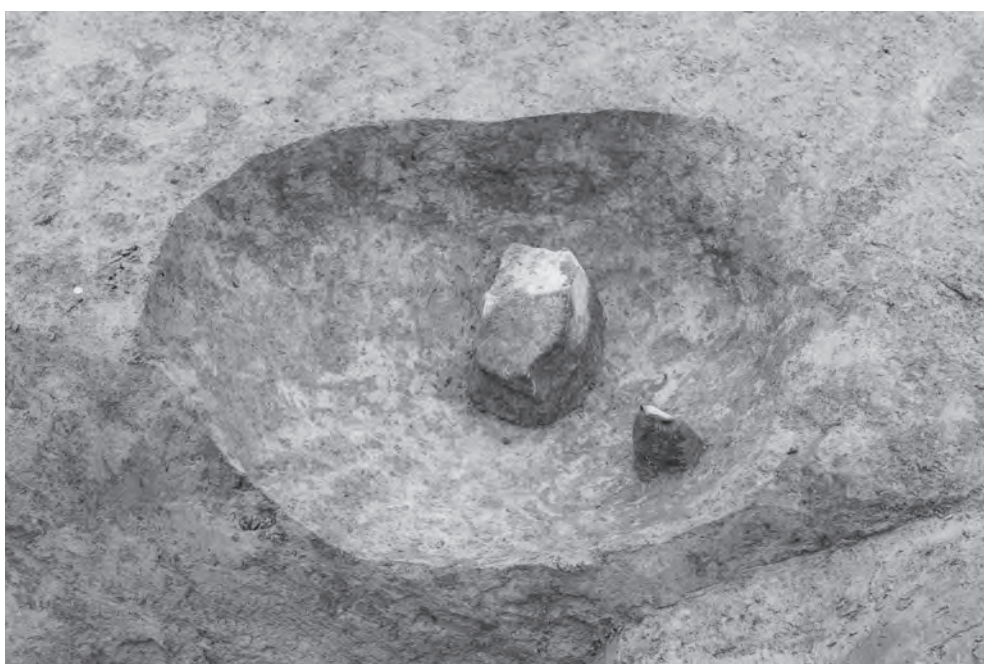




1 1区上層全景
(北西上空から)



2 1区東壁
(西から)



3 土坑1
(北から)

1 土坑2
(南東から)



2 溝1
(東から)



3 溝2
(南西から)



図版4



1 溝4
(南西から)



2 溝4
(北東から)



3 溝4
土師器皿出土状況
(北東から)

1 溝4
石列・土師器皿
検出状況
(北東から)



2 溝4
石列・土師器皿
検出状況
(北から)



3 溝5
(西から)





1 2区遠景
(北上空から)



2 2区西半全景
(北西から)



3 2区南西壁
(北東から)

1 溝6
(北から)



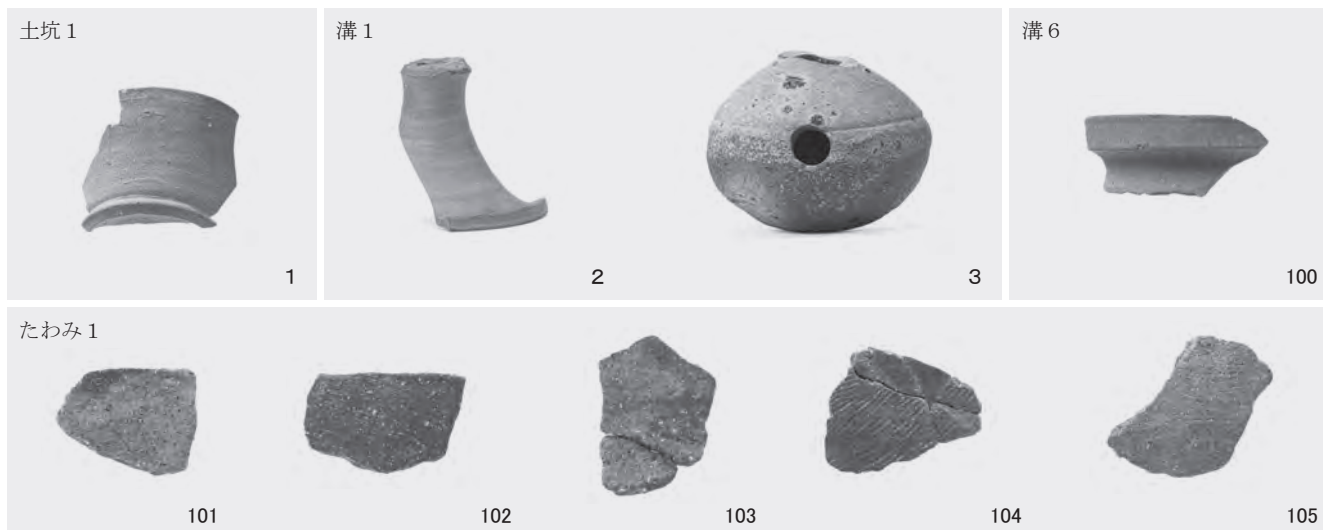
2 たわみ1 検出状況
(北西から)



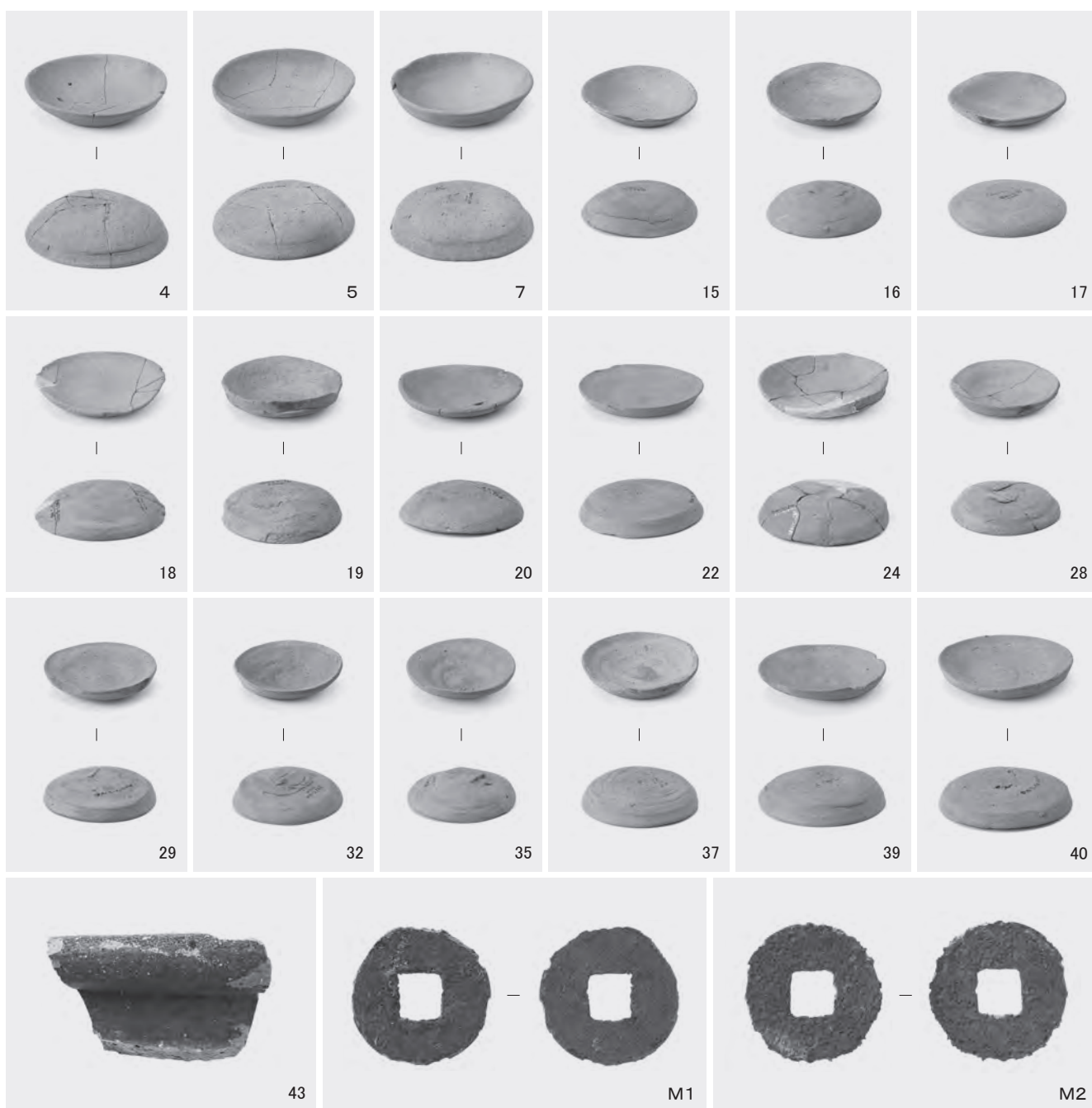
3 たわみ1
(北西から)



図版 8

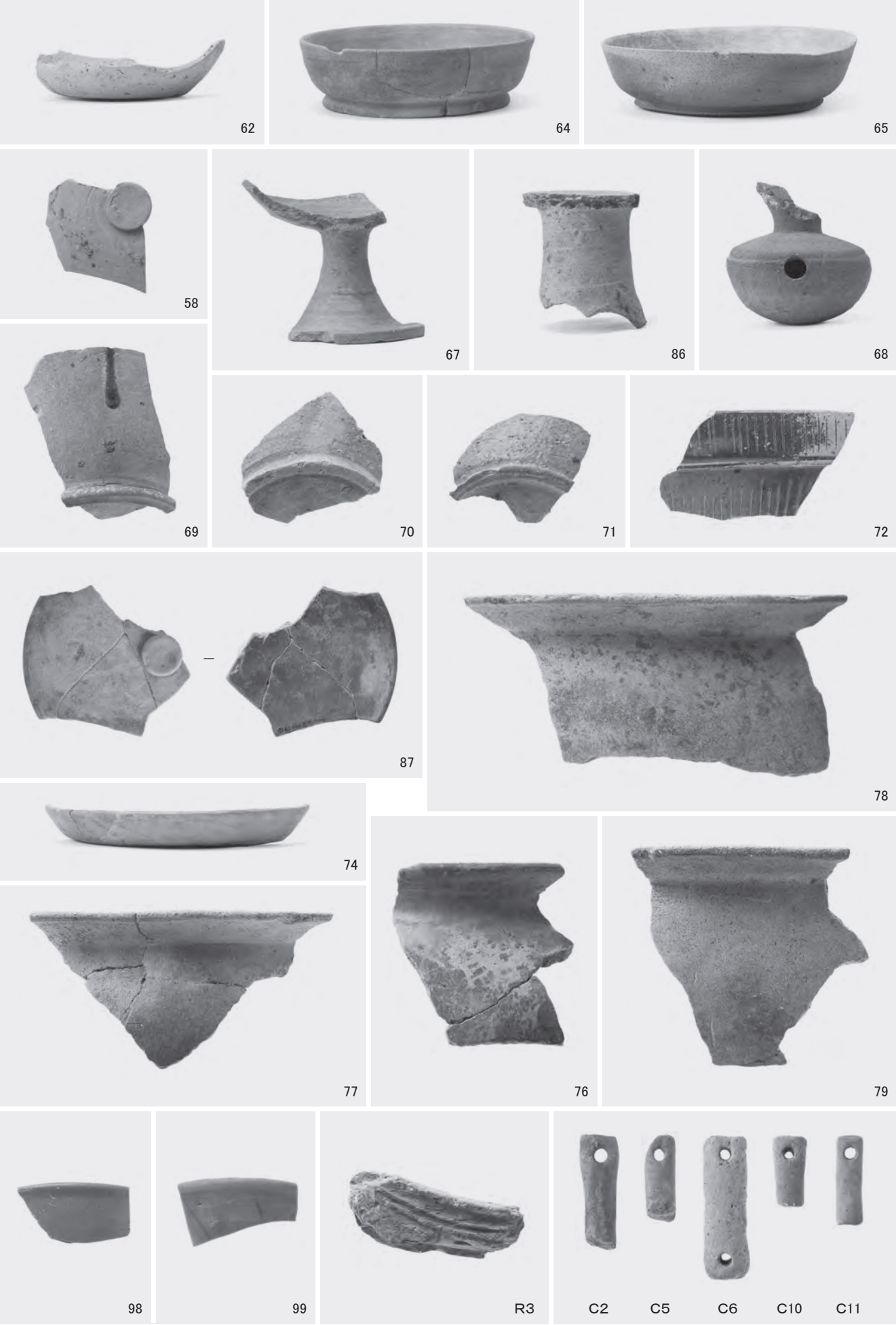


1 土坑 1・溝 1・溝 6・たわみ 1 出土土器



2 溝 4 出土遺物①





遺構に伴わない遺物

報告書抄録

ふりがな	みずえいせき							
書名	水江遺跡							
副書名	高梁川河川整備事業に伴う発掘調査							
巻次	1							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	270							
編著者名	石田爲成・物部茂樹・渡邊恵里子・河合忍・藤井雅大・森本蓮							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 URL https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	2024年12月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
みずえいせき 水江遺跡	おかやまけんくらしきし 岡山県倉敷市 みずえにしあちろう 水江・西阿知町	33202	332021173	34° 35′ 58″	133° 44′ 5″	20221108 } 20221227	650	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
水江遺跡	集落	縄文時代		たわみ1		縄文土器		
		弥生時代		溝1		弥生土器		
		古墳時代		溝1		須恵器		
		奈良時代		土坑2、溝2		須恵器、土師器、瓦		
		室町時代		溝2		土師器、瓦質土器、備前焼、銅銭		
要約	水江遺跡は高梁川の中州や河川敷を中心に所在する。今回の調査地は、高梁川東岸の河川敷内の2か所に分かれており、上流側を1区、下流側を2区として調査を行った。1区では、古墳時代の溝1条、主に奈良時代に属する土坑2基と溝2条、室町時代を中心とする溝2条を確認した。また、包含層中からは奈良時代の丹塗土師器やらせん状暗文を施す土師器が出土している。室町時代の溝4は、北東から南西方向に直線的に掘削されており、一部薬研状の掘り方を持つことから屋敷地を区画する溝か居館を囲む堀の可能性ある。2区では、縄文時代後期のたわみ1基を検出しており、遺跡の成立時期が縄文時代に遡ることが明らかになった。また、弥生時代後期以降に埋没したと考えられる溝1条を確認した。 水江遺跡は高梁川河口部に立地し、古くから海上や河川の交通・流通の要衝であったと考えられ、奈良時代には港津等に関連する公的な施設の存在も推定される。							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 270

水江遺跡

高梁川河川整備事業に伴う発掘調査1

令和6年12月20日 印刷

令和6年12月20日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市駅南1-1-5